

山口総長 年頭の挨拶

サステナビリティ・ウィーク2016の開催

第19回北海道大学・ソウル大学校ジョイントシンポジウムを開催



年頭の挨拶

- 1 総長 山口 佳三

全学ニュース

- 3 大学入試センター試験の実施
 4 サステナビリティ・ウィーク2016の開催
 23 第19回北海道大学・ソウル大学校ジョイントシンポジウムを開催
 32 北大フロンティア基金
 33 平成29年度予算案（本学関係分）の主要事項
 36 平成28年度北海道大学ユニバーシティ・アドミニストレーター育成講座を実施
 36 第2回HUCIフォーラム「海外大学との英語による協働教育をどう進めるかー学内の好事例と今後の課題」を開催
 37 ワークショップ「学生の思考を深め、発言を促すための問いかけと場づくり」を開催
 37 「英語によるアカデミック・プレゼンテーションの基礎」を開催
 38 「シラバスのブラッシュアップ研修」を開催
 38 第2回鮮度保持技術シンポジウムを開催
 39 小中学生向け科学体験イベント「さっぽろサイエンスフェスタ2016 in 北大」を開催
 40 人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで第30回「赤い糸会&緑の会」を開催

部局ニュース

- 41 工学系部局がインド工科大学ハイデラバード校と部局間交流協定を締結
 41 歯学研究科が全北大学校歯医学専門大学院との姉妹校提携25周年記念交流行事を開催
 42 歯学研究科で香港大学歯学部学生団体との交流行事を開催
 42 スラブ・ユーラシア研究センターが冬期国際シンポジウム「体制転換から四半世紀：ポスト共産主義社会の多様化を再考する」を開催
 43 国際広報メディア・観光学院で国際シンポジウム「地方創生と国際化ー北海道の未来への挑戦」を開催
 43 平成28年度 薬学部成績優秀賞授与式を挙行
 44 観光学高等研究センター公開講座「明日の観光を考える」が終了
 44 工学系部局でアクティブラーニングに関するFDを開催



サステナビリティ・ウィーク2016



第19回北海道大学・ソウル大学校ジョイントシンポジウム

- 45 工学系部局で安全衛生管理講演会を開催
 45 文学研究科で研究室運営に関するFD研修を開催
 46 環境科学院・地球環境科学研究院でFD研修会「国際的な教育プログラム構築に向けて」を開催
 46 環境科学院・地球環境科学研究院で「ハラスメント予防FD研修会」を開催
 47 農学研究院で平成28年度第2回FD研修会を開催
 48 生命科学院がアクティブラーニング形式の「Research Ethics Workshop for IGP students」を開催
 48 低温科学研究所技術部で第22回技術報告会を開催
 49 総合博物館で「はじめての人工雪ー誕生80年記念企画 中谷宇吉郎展」を開催
 49 環境健康科学研究教育センターが第2回世界保健機関西太平洋地域協力センターフォーラムに参加
 50 「脳科学研究教育センター合宿研修」の開催
 51 北海道大学病院で「第55回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ」を実施
 51 附属図書館で「救命導入（AED）講習会」を開催
 52 タイ・バンコクにおいて「第3回国際食資源学フォーラムーアジアの食資源問題と大学の果たすべき役割ー」を開催

博士学位記授与 53

諸会議の開催状況 55

学内規程 55

研修

- 56 平成28年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修

表敬訪問 57

人事 58

- 59 新任部局長等紹介
 59 新任教授紹介

訃報

- 60 名誉教授 竹山 太郎 氏



国際広報メディア・観光学院
国際シンポジウム「地方創生と国際化ー北海道の未来への挑戦」



生命科学院
Research Ethics Workshop for IGP students



総合博物館
「はじめての人工雪ー誕生80年記念企画 中谷宇吉郎展」



附属図書館
救命導入（AED）講習会

表紙：小中学生向け科学体験イベント「さっぽろサイエンスフェスタ2016 in 北大」（関連記事39頁に掲載）

裏表紙：北の鉄道風景[®] 流れ山

年頭の挨拶

北海道大学総長 やまぐち 山口 けいぞう 佳三



新年あけましておめでとうございます。

平成29年の年頭にあたり、北海道大学の教職員、学生・大学院生の皆さん、そして様々な形で北海道大学の活動をご支援くださっている皆さんに、新年のご挨拶を申し上げます。

私達は、今年度4月より国立大学法人として、第3期中期目標・中期計画期間を迎えました。そして、昨年末には、平成29年度政府予算案が閣議決定されました。国立大学法人に関わる事項としては、第3期としての予算編成の骨格は、平成28年度予算によって明らかとなっていました。その方針に従って、まず、運営費交付金は前年度比20億円減の1兆925億円となり、これに補助金として、機能強化促進費45億円が新規に付加されました。また、科学研究費補助金は前年比11億円増の2,284億円となっています。

さらに、個別大学に通知された予算の内訳を見ますと、昨年度ご報告したとおり、これまで文部科学省に概算要求として申請してきた経費は、一括して大学の機能強化経費とされ、各大学の機能強化としての位置づけが問われています。予算提示の内訳も個別事項ごとの提示ではなく、位置づけごとの予算づけとなっています。すなわち、もはや個別の部局の将来計画のみでの予算獲得は不可能であり、大学として知恵を出し合うことが問われます。

本学に内示された運営費交付金は昨年度比7.69億円減の354.58億円であり、所要額で予算措置される退職手当などの減額があるものの、大学毎の評価に基づき配分される機能強化促進分と新規補助金である機能強化促進費は、運営費交付金の減額分（▲1.6%相当分）を上回る評価配分がなされ、昨年度の機能強化経費予算に加算される形で増額となっています。しかし、残念ながら、この機能強化促進分からは、一般教職員の人件費に充当することはできません。機能強化促進分の評価は昨年度に続いて良好であり、本学の来年度の機能強化活動がさらに活性化されることを期待したいと思います。

また、平成29年度予算では、運営費交付金は、優れた実績のある機能強化の取り組みについて、評価に基づき機能強化経費から基幹経費へ移し替える「基幹経費化」の仕組みを導入した（国立大学法人全体で53億円）とあります。この「基幹経費化」は、今後の本学の課題となろうと考えます。

さて、ここで、本学のこの1年の歩みを振り返りたいと思います。

まず、研究推進の面では、昨年1月に創成研究機構内に「グローバルファシリティセンター」が設立されました。このセンターには、高度な研究機器や分析技術を活用した国際的な教育人材育成拠点としての役割が期待されます。産学・地域協働推進機構では、6月に北大発ベンチャー称号記授与式が挙行政され、この認定制度による初めての認定企業9社にこの称号が授与されました。産業創出部門では、今年度までに11部門が設置されたほか、現在6部門が設立を検討中であり、FMI拠点を中心にすでに70名以上の企業からの研究者が研究に従事しています。さらに、COI『食と健康の達人』拠点では、中間成果発表シンポジウム「未来を見つめる」を12月に東京で開催しています。

国際連携の面では、10月より国際本部が国際連携機構に再編され「Hokkaidoユニバーサルキャンパス・イニシアティブ」構想推進のための組織整備がなされました。HUCI事業において、基本となる4つの教育改革プランについても着実にその進展が図られました。

最初のプランであるNITOBE教育システムについては、まず、新渡戸カレッジにおいて、同窓生の支援による新たな海外インターンシップが始まりました。文系を中心に、カレッジ生による長期留学者数も着実に伸びています。新渡戸スクールの方は、受講生も倍増され、留学生との混合によるグループ学習が成果を挙げてきています。次に、新たなGI-CoREのプラットフォームとして、ソフトマターグローバルステーション、ビッグデータ・サイバーセキュリティ

ティグローバルステーション及び北極域研究グローバルステーションが4月に設置されました。そして、異分野連携による「国際大学院」群の新設については、医理工学院、国際感染症学院、国際食資源学院の3つの学院が今年4月に開設されます。そして、今年度、ラーニング・サテライトについては、年間約40科目が開講予定であり、Hokkaidoサマー・インスティテュートについては、6月1日から9月13日の期間に71科目が開講され、115名の国内外からの研究者が英語による講義を行いました。

こうした本学の国際関係の活動をさらに飛躍させるために、国際大学協会（IAU）に依頼して、「大学国際化のための助言サービス（ISAS2.0）」のための委員会による現地調査を10月に実施し、本学の様々な階層の国際関係事業従事者からの聞き取り調査が行われました。この委員会からの報告書は12月に届いています。この報告書では、本学のHUCI事業を、全学の構成員の参加によって活性化するための、様々な側面からの助言がなされています。この報告書の今後の活用が期待されます。

さらに、この4年間で総括しての将来展望を述べたいと思います。

国立大学法人北海道大学の4つの基本理念であるフロンティア精神、国際性の涵養、全人教育、実学の重視を踏まえ、「北海道大学近未来戦略150」を策定し、「世界の課題解決に貢献する北海道大学」たるべきことを目標として掲げました。そして、これまで他大学にはない本学の強みを創り上げることに意を用いてきました。毎年、日本全国から新入生を集める「北大ブランド」というべき知名度は、他大学にはない本学の強みであり、伝統の蓄積に支えられた総合入試は他大学には真似のできない選抜方法です。

また、北大方式と呼ばれる全学教育のシステムも、戦後の本学の教養教育の伝統に支えられており、日本の大学における教養教育の一つのモデルとされています。これに加えて、新渡戸カレッジは、高い評価を受けておりますが、特にフェロー制度より始まった連合同窓会（現在は校友会エルム）との協働活動は、今後予定している運営会議での評価委員会・諮問委員会の提言を通して、大学教育のありようを変える可能性をも秘めた新たな教育の形として、今後の発展が期待されます。全国に先駆けて、海外の研究ユニット丸ごと誘致を実現した国際連携研究教育局（GI-CoRE）の制度は、本学の研究面での強みを活かし、それを創り出すものであり、そしてその研究成果をもとに融合的国際大学院を創り出す仕組みとなっています。また、COI『食と健康の達人』拠点は、産学連携を越えて、その研究成果を社会実装する試みを岩見沢市から始めています。これも、これまでの社会と大学の関わり方を大きく変えるものだと思います。それに加えて、FMI国際拠点を中心に始まっています産業創出部門の活動は、他大学に例を見ない新しい組織対組織の産学連携の形を創り上げています。そして、昨年6月に発足しました「校友会エルム」では、4月より新入生とその保護者の入会を受け、同窓会活動の

ありようを刷新します。この活動も本学の強みを支えるものと期待されます。

昨年後半は、人件費削減をはじめとする国立大学法人の財政問題に多くの時間を割き、議論を重ねてきました。冒頭に報告しましたように、運営費交付金については、今後もバランスを欠いた展開が続くものと思われます。この財政問題を本学構成員全員が理解され、早急に抜本的対策を築き、本学の強みを生かした発展を目指していただきたいと思います。

最後になりますが、平成29年が北海道大学の将来に向けての新たな踏み出しの年となることを祈念しますとともに、教職員並びに学生・大学院生の皆さんにとって実り多い年であることを心より願い、私からの新年の挨拶とさせていただきます。

新年交礼会の様子

1月4日（水）、山口総長の年頭の挨拶とともに、新年交礼会が始まりました。会場となった百年記念会館大会議室には、役員、部局長等が大勢集まりました。



乾杯の発声をする三上 隆理事・副学長

■ 全学ニュース

大学入試センター試験の実施

平成29年度の大学入試センター試験が、1月14日（土）・15日（日）の両日、全国一斉に実施されました。

本学においても、大学入試センター試験実施体制により、実施本部、総務部、試験場部、救急医療部、連絡部及び広報部を設置し、本学教職員等延べ

約1,300人の協力を得て、平穩のうちに終了しました。

全国の志願者は、前年度より12,199人増加し575,967人でした。道内の志願者は、前年度より186人減少し18,585人となりました。

本学が担当する試験場（藤女子大学

試験場を含む）の志願者数は、昨年より40人少ない5,391人で、各試験場（会場）の受験状況は次のとおりです。

（学務部入試課）

平成29年度大学入試センター試験受験状況

日程 教科	1月14日（土）											1月15日（日）								
	地理歴史、公民		国語		外国語【筆記】		英語【リスニング】		英語【リスニング】再開テスト		理科①		数学①		数学②		理科②			
	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	辞退した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数	受験した者の人数	欠席した者の人数		
北海道大学試験場	農学部会場	553	506	47	535	18	537	16	530	23			11	542	535	18	518	35	507	46
	人文・社会科学総合教育研究棟会場	792	775	17	778	14	778	14	776	16			0	792	777	15	775	17	774	18
	理学部会場	411	389	22	391	20	390	21	390	21			0	411	388	23	388	23	385	26
	工学部会場	672	553	119	626	46	628	44	625	47			53	619	614	58	560	112	551	121
	高等教育推進機構A会場	752	668	84	670	82	660	92	572	180			136	616	169	583	80	672	0	752
	高等教育推進機構B会場	890	858	32	866	24	863	27	852	38			807	83	819	71	790	100	16	874
	保健科学研究院会場	453	269	184	382	71	401	52	376	77			265	188	358	95	281	172	56	397
	高等教育推進機構N会場	13	9	4	10	3	11	2	11	2			1	12	9	4	9	4	7	6
藤女子大学試験場	500	481	19	482	18	482	18	476	24			433	67	438	62	408	92	0	500	
札幌地区 小計	5,036	4,508	528	4,740	296	4,750	286	4,608	428			1,706	3,330	4,107	929	3,809	1,227	2,296	2,740	
		89.5%	10.5%	94.1%	5.9%	94.3%	5.7%	91.5%	8.5%			33.9%	66.1%	81.6%	18.4%	75.6%	24.4%	45.6%	54.4%	
北海道大学水産学部試験場	355	300	55	308	47	311	44	311	44			107	248	281	74	258	97	164	191	
合計	5,391	4,808	583	5,048	343	5,061	330	4,919	472			1,813	3,578	4,388	1,003	4,067	1,324	2,460	2,931	
		89.2%	10.8%	93.6%	6.4%	93.9%	6.1%	91.2%	8.8%			33.6%	66.4%	81.4%	18.6%	75.4%	24.6%	45.6%	54.4%	

※欠席した者には当該教科を「受験しない」と申請し登録していない者も含まれる



受験風景

サステナビリティ・ウィーク2016の開催

サステナビリティ・ウィーク2016を振り返って



サステナビリティ・ウィーク2016 実行委員長
国際交流担当理事・副学長 上田 一郎

サステナビリティ・ウィーク事業は今年10周年を迎え、34企画が集まりました。今年は、国連「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が掲げた「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成に向け、大学・研究者・学生・市民社会が、どのように貢献できるのかについて、提案そして議論を行う年となりました。特徴的な企画の一つが、10月29日(土)・30日(日)に開催された10周年記念国際シンポジウムでした。「SDGsに貢献する高等教育のあり方」という共通テーマの下で、附属図書館、北極域研究センター、ヘルシンキオフィス、教育学研究院、応用倫理研究教育センター、国際連携機構が分科会を提供し、多角的な議論を可能にしてくれました。強調されたのは、学生が社会変革に参画しつつ学んでいけるような学修環境の重要性でした。

因らずも本学の学生が企画した2つのコンテストは、まさしく学生が社会変革に寄与しようとする意欲的な取り組みでした。一つは、全日本学生英語弁論大会「ポテト杯」、もう一つは学生による国際社会問題ビジネスコンペティション「HULT PRIZE」です。どちらも持続可能な社会を実現するための解決法を学生が自ら考え出し、英語でプレゼンテーションし、社会人を含む審査員を納得させ、

将来の希望の大きさを競う企画でした。これらの企画は、授業や研究そして生活の中で得た知識や技術を総動員して、学生がカリキュラムの外でさらに学び成長する機会を提供するものです。こういった学生の自主的な学びの機会を支えるのも、サステナビリティ・ウィークが果たすべき重要な役割だと改めて思いました。

10年間を振り返りますと、「持続可能な社会の実現に向けた教育研究の推進週間」と位置づけられる当該事業に賛同し集った企画は合計339あり、参加者は17万7千人を超えました。人間社会、自然環境、経済の最適なバランスを求めて、啓発・啓蒙、成果報告、議論、提案などを行った本学の教職員や学生のグループが339あったということです。主催者や企画タイトルを見ると、この人類の課題に対し多角的なアプローチが必要であることを痛感すると共に、本学がこれらを提供し得る豊かな人的資源と教育研究成果を保有している事実を誇りに思います。

10年間の歴史と経験そして恵まれた人的資源を活かして、「北海道大学近未来戦略150」のビジョンでもある「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」向かって、サステナビリティ・ウィークを続けていきますので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

10月12日(水), 14日(金), 18日(火), 20日(木), 24日(月), 26日(水) 会場: 附属図書館本館リテラシールーム

国際機関情報の探し方セミナー「SDGs(持続可能な開発目標)の現在地—統計で知る」

主催: 附属図書館(国連寄託図書館) / 実施責任者: 附属図書館利用支援課 利用支援課長 樋口秀樹

附属図書館は、国連寄託図書館として国連をはじめとする国際機関の資料・情報の探し方セミナーを年2回、不定期に開催しています。秋には、「SDGs(持続可能な開発目標)の現在地—統計で知る」と題して、今年から始まった開発目標であるSDGsをテーマに実施しました。

SDGsには17の目標、169のターゲット、230の指標があります。指標の多くは統計として無料のWebツールで入手可能です。今回のセミナーでは、これらの統計データの入手方法を実習形式でご紹介することで、SDGsの達成

度を各参加者が自ら深く知ることを目的としました。

セミナーでは、あらかじめ用意しておいた20個のSDGsの指標のうち、参加者の多数決によって実習を行うものを選びました。実習をしないものについても、対応する統計のWebツールと、その利用方法を示した資料を配布しました。

参加者は、本学の学生20名と一般市民2名でした。セミナー終了後に実施したアンケートでは、「SDGsに関するデータを細かく検索する方法を学べ、大変有意義だった」「手を動かし

ながらの講義だったのでよく理解できた」との回答が見られました。当日の資料についてはHUSCAPに掲載しています。



セミナーで実習を行う参加者の様子

10月17日(月) 会場: 学術交流会館小講堂

国際シンポジウム「環境と健康領域における持続可能な開発目標(SDGs)」

主催: 環境健康科学研究教育センター / 共催: 保健科学研究院, 文学研究科, 地球環境科学研究院 / 実施責任者: 環境健康科学研究教育センター 教授 小笠原克彦

本シンポジウムでは、国連が定める「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成に向けて、特に環境と健康に関係して、安全な水環境、タバココントロール、有害物質の排除、母児の健康などの重要な課題をテーマに、危険な環境要因を削減し、健康な社会を創造するための研究や活動を取り上げた4つの講演を行いました。

フィリピン大学のRomeo Quizon公衆衛生学部長からは「フィリピンにおける水質と化学物質管理の改善に向けたフィリピン大学公衆衛生学部の貢献」、国立保健医療科学院/WHOたばこ製品の成分規制に関する研究協力センターの稲葉洋平特命上席主任研究官からは「たばこの規制に関する世界保健機関枠組条約と日本におけるたばこ対策」と題して、SDGs達成に向けた

活動について講演がありました。

引き続き、本センターの宮下ちひろ特任准教授より「環境化学物質による母児への健康影響」、地球環境科学研究院の田中俊逸教授からは「汚染物質除去のための新規吸着剤の開発」について、それぞれの研究が人々の健康や環境改善にどう役立つかについて発表しました。

本シンポジウム中では、参加した市民や学生から講演者への質疑応答も行われました。

本センターは、WHOCC(WHO研究協力センター)の一つとして世界の人々と協力し、SDGsに沿って進んでいきます。また、環境と健康に関する様々な課題に取り組むと共に、市民講演会や、研究成果の発表をできるだけ多く実施していく予定です。



講演の様子



講演者・関係者の集合写真

10月20日（木） 会場：学術交流会館第3会議室

講演会「超高齢社会を迎えてー感性工学の果たす役割ー」

主催：工学研究院人間機械システムデザイン部門インテリジェントデザイン研究室／
共催：日本感性工学会北海道支部、札幌市立大学デザイン学部／
実施責任者：工学研究院人間機械システムデザイン部門 特任教授 成田吉弘

現在、生活者における高齢者の割合は人口の4人に1人であり、高齢者の割合が今後も増加の一途をたどることは確実です。この状況の中で、生活環境でのモノづくり、コトづくりの重要性が「高齢者に配慮する」という観点から高まることは言うまでもありません。本企画は、人間の豊かな暮らしを支える感性工学の分野から、世界で最も早く超高齢社会を迎えた日本の現状を理解し、超高齢社会における様々な課題を見つけ出すことを目的としました。

本講演会では3名の講師を招き、超高齢社会に関する全般的な説明から、高齢者に関する感性工学的理解、また感性工学と学問的関連が深いデザイン分野の事例について講演してもらいました。

はじめに、札幌大谷大学社会学部地域社会学科の永田志津子教授より、さらなる高齢化の進展や高齢者世帯の状

況、介護保険制度の概要と制度の変容、また高齢者の住まいと在宅生活の困難など、日本における「超高齢社会の現状」について紹介がありました。続いて、工学研究院の李美龍助教が、感性工学の定義から、感性工学分野で行われている高齢社会に関する研究の紹介や高齢者の認識の特性について感性工学的観点で解説しました。最後に、札幌市立大学デザイン学部の柿山浩一郎准教授から、高齢社会に対するデザイン分野の研究成果や高齢者によるデザイン評価など、超高齢社会のた

めのより具体的な事例紹介がありました。講演後は参加者との質疑応答を通して、超高齢社会における理解を高めることができました。

当日はあいにく初雪が降った悪天候の影響もあり、参加者は14名でしたが、講演内容への関心は非常に高く、密度の高い意見交換ができました。今後は、本講演会で指摘された課題を検討し、実際の生活に反映するための試みを感性工学分野はもちろん、関連分野と連携して探っていきます。



開会挨拶を述べる司会の成田吉弘教授



講演に熱心に聴き入る参加者

10月26日（水） 会場：創成研究機構、遠友学舎

セミナー「変貌する北極域とアジア ～北極海航路とアジア：欧州とアジアの研究者による学際的研究の動向～」

主催：北極域研究センター、リーズ大学東アジア研究所、GI-CoRE北極域研究グローバルステーション／
実施責任者：北極域研究センター 教授 大塚夏彦

本国際セミナーは、英国リーズ大学のクリストファー・デント教授を代表とする研究プロジェクト「北極海航路とアジア」の研究成果を広く社会に紹介することを目的に開催しました。このプロジェクトは、英国・フィンランド・スウェーデン・ノルウェー・インド・日本・韓国・中国の研究者による、政治・経済・海事・地政学・環境分野にわたる学際的ネットワークのもとで進められています。

今日、北極海航路の活用に関しては、環境的、経済的、地政学的、社会的、並びに国家政策的な要因に強く由

来しながら、いかに持続的に実現するかが重要な課題となっています。そこで本セミナーでは、北極海航路に関わるインフラ投資、経済インパクト、海運分野の政策動向、リスクマネジメン

ト、展望などに関する研究者からの講演を、専門家や研究者向けのワークショップと学生や一般市民向けセミナーの2部構成で開催しました。

専門家向けワークショップでは、研



ワークショップの様子



公開セミナーの様子

究者・学生ら17名が参加、一般市民向けセミナーには産官学あわせて37名が参加しました。いずれにおいても、多くの質問・コメントが参加者から寄せられ、予定時間を超えて質疑が行われました。特に一般市民向けセミナー

後、複数の参加者から「今回のセミナーによって、北極海航路に関する欧州やアジア各国の多様な視点を知ることができて有意義であった」との感想が寄せられました。

北極域研究センターでは、今後も

産・官並びに一般市民を対象として北極研究の情報発信及び共同での活動を展開し、北極に関わる新しい研究領域及び事業機会の創出に取り組む予定です。

10月27日(木) 会場：国際連携機構

北大×JICA連携企画 青年海外協力隊トークイベント 「持続可能な社会をつくる日本のボランティア」

主催：独立行政法人国際協力機構北海道国際センター（札幌）／共催：国際連携機構／
実施責任者：国際部国際連携課 国際協力マネージャー 榎本 宏

持続可能な発展に資する海外ボランティアとして、青年海外協力隊の事業説明及び本学大学院に在籍する帰国隊員の報告会を行いました。

青年海外協力隊の事業説明では、ODA（政府開発援助）とは何か、また日本が国際協力を行う必要性から、実際に青年海外協力隊に参加するにあたってどういった制度があるのかを、JICAボランティア事業担当者が講演しました。

帰国報告では、本学在学中に青年海外協力隊に参加し、ネパールにてコミュニティ開発という職種に従事した現役大学院生の隊員が自身の体験談を語りました。

青年海外協力隊の活動期間は2年であり、決して大きなことが出来るわけではありませんが、現地に溶け込み、現地のニーズを把握し、本当に現地に必要なものを現地のリソースの中から見つけ出し繋げていくことが持続可能

な発展において大切なことだと、参加者と共有することが出来ました。



帰国報告の様子

10月28日(金)～30日(日) 会場：人文・社会科学総合教育研究棟（W棟）409室

第10回応用倫理国際会議－応用倫理学の過去・現在・未来－

主催：応用倫理研究教育センター／実施責任者：応用倫理研究教育センター 准教授 眞嶋俊造

本国際会議では、ニューカッスル大学のピーター・ストーン教授を含む4名の全体講演、4つのワークショップと59件の一般発表を行いました。

応用倫理国際会議は平成19年より毎年行っています。今回のテーマは「応用倫理学の過去・現在・未来」でした。ストーン教授は文化遺産保護の研究や教育における世界的権威であり、サステナビリティの倫理についての研究の第一人者です。ストーン教授は“Ethical Issues Relating to the Protection of Cultural Property and Cultural Heritage During Armed Conflict（武力紛争における文化財と文化遺産の保護に関する倫理的問題）”と題して講演しました。武力紛争下において犠牲になるのは人々だけではなく、他の動物や自然や環境も影響を受

けるが、文化遺産や文化財も例外ではないことを私達に強く自覚させ、文化遺産や文化財の保護や回復・修復に向けた努力を強く動機付ける内容でした。本講演は、武力紛争の際の文化財の保護に関する条約で定められたブルーシールドの活動に焦点をあて、人類共通の遺産であり、未来世代に受け継ぐべき文化遺産や文化財が戦闘によって付随的に破壊されるだけではな



ストーン教授による講演の様子

く、それ自体が直接の攻撃の標的になる場合やその破壊自体が目的になる場合、さらに文化財の略奪や密売に至るまでの武力紛争の事実と、それを回避・阻止することの重要性と実施する方法についての議論が展開されました。

次年度以降においても、サステナビリティの倫理を応用倫理国際会議の主要なテーマの一つとしていく基盤を作ることができました。



マイケル・デイビス教授による講演の様子

10月28日(金) 会場：農学研究院食資源研究棟 (F319セミナー室)

北大・地球研合同地球環境セミナー 「篤農家」から地域社会と環境の未来を学ぶ

主催：工学研究院、総合地球環境学研究所／共催：農学研究院、国際連携研究教育局食水土資源グローバルステーション／
実施責任者：工学研究院 教授 船水尚行

本セミナーは機関連携プロジェクトを実施している本学と総合地球環境学研究所の共催で行いました。総合地球環境学研究所と共催でサステナビリティ・ウィーク行事を行うのは今回で3回目となります。

地域や地球が抱える問題を解決し、持続可能な未来を築くためには、多様な観点から地域を見ていく必要があります。例えば、技術的、経済的、制度的、哲学的観点を複合的に組み合わせていくのです。今回、「篤農家」に注目したのは、篤農家は地域に根ざして農業を営む方々であり、バイタリティあふれる行動力と実践力、長年の経験から得た人生哲学などをお持ちだからです。そして、持続可能な生活の実践

者でもあります。すなわち、篤農家の方々は多様な観点を複合的に組み合わせ、それを実践しています。篤農家の魅力は農業を超えたところにもあります。篤農家が私達の未来に大きなヒントを与えてくれるのではないのでしょうか。

このような目的のもと、アラブ世界

と日本の篤農家の比較についての話、西条野外学校の取り組み、水産増殖技術の開発と実践の3つの話題提供と議論を行いました。私たちは「篤農家」に限らず、「篤漁家」、「篤林家」、「篤〇家」といった地域に根差したリーダーから、多くのことを学ぶことができる実感させる会合でした。



開会の挨拶をする船水尚行工学研究院教授



秋田県とサウジアラビアの篤農家について発表する縄田浩志秋田大学教授

10月28日(金) 会場：附属図書館本館大会議室

法・図共同ワークショップ

「世界のルールの作り方・使い方—人権に関する国連諸機関の仕組みと情報の調べ方—」

主催：附属図書館、法学研究科（附属高等法政教育研究センター、法学政治学資料センター）／
実施責任者：附属図書館利用支援課 利用支援課長 樋口秀樹

附属図書館が国連寄託図書館として開催した2 Daysイベント、1日目の企画は、附属図書館・法学研究科共同ワークショップ「世界のルールの作り方・使い方」シリーズ第3回、「人権に関する国連諸機関の仕組みと情報の調べ方」です。

今回の「世界のルールの作り方・使い方」の内容は、国連広報センターで不定期に実施している国連資料ガイドの「人権編」にあたります。同センターから講師の千葉 潔氏を招聘し、開催しました。

3部構成の第1部は、国連と人権の基礎知識でした。国連の各機関における人権への取り組みの進展、現在の国連の人権に関する文書の種類や出所、特に重要な文書などのレクチャーがありました。

第2部は、国連と人権 情報資料／文書構造と調べ方の実際でした。参加

者が2人1組になって、手元の国連資料のサンプルについて、識別のために付与されている文書記号を手がかりにして、どの機関が出したどのような文書なのかを解くワークショップを行いました。

第3部では、インターネット検索方法と様々な活用術でした。第1部、第2部で触れた国連文書をWebページから入手する手順などの解説がありました。

参加者は、本学の学生33名と一般市民5名でした。イベント終了後に実施したアンケートでは、「国連が人権に

関してどのような種類の文書を出しているのか知ることができよかった」

「図書館とグローバルとサステナビリティが上手く組み合わせだったイベントだと感じた」「マスコミでの取材活動に大変有用な講義とと思いました」といった声が寄せられました。閉会後は、参加者が千葉氏に熱心に質問をする様子が見受けられました。

附属図書館及び法学研究科では、今後もテーマを変えて「世界のルールの作り方・使い方」開催を予定しています。



文書情報を学ぶワークショップの様子



ウェブサイトでの調べ方を説明する千葉氏

10月29日(土)・30日(日) 会場：学术交流会館小講堂

サステナビリティ・ウィーク10周年記念国際シンポジウム～SDGsへ貢献する高等教育のあり方～

主催：北海道大学／実施責任者：国際連携機構長（サステナビリティ・ウィーク実行委員長） 上田一郎

サステナビリティ・ウィークの10周年を記念して、10月29日(土)・30日(日)に学术交流会館にて国際シンポジウムを開催しました。世界規模で2030年までの達成を目指す国連「持続可能な開発目標(SDGs)」へ貢献する高等教育のあり方を議論すべく、214人が参加しました。

本シンポジウムは、サステナビリティ・ウィークの縮小版の形式を取りました。つまり、共通テーマの下でサステナビリティ・ウィーク実行委員会は全体会を開催し、学内の5つの組織が学外の団体と共催して9つの企画を分科会という位置付けで提供しました。

全体会は2部制とし、第1部は29日(土)に開催し、文部科学省国際統括官付国際統括官補佐の鈴木規子氏による挨拶の後、上田一郎理事・副学長がサステナビリティ・ウィーク10年の歩

みを紹介しました。続く2つの招待講演と、本学の「サステナビリティ教育検討プロジェクトチーム」による特別講演を通じて、参加者は今回のテーマについて理解を深めました。招待講演では、持続可能性を追求するための国連SDGsをはじめとする主要なイニシアチブが概説されました。その上で、アメリカとドイツで高等教育機関や研究者が関与した社会教育や市民教育の事例、課題、その発展可能性が、イニシアチブと関連づけて論じられました。特別講演は、小内透教育研究院長が進行しました。まず、山下正兼副学長より、総長へ提言する予定のサステナビリティ教育の推進方策案が示されました。その後、4人の指定討論者により、当概方策の特徴や課題、改善案が論じられました。本学におけるサステナビリティ教育の定義と意

義について、より明確化させることの必要性が強調されました。

第2部は30日(日)に開催し、分科会からの報告を聞いた上で、SDGsに貢献する高等教育のあり方について参加者間で議論が行われました。ここでは、持続性に係る課題や教育のステークホルダーごとに分かれて議論された内容が分科会の代表者から報告されました。その後、SDGsに貢献する人材育成に関わる教員や学生を支える大学の組織や制度のあり方について参加者間で議論を行いました。それにより、特に本学において継続的な議論を必要とする課題の方向性について示唆が得られました。詳しくは、シンポジウム特設ウェブサイトをご覧ください。

◆<http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sdgs/index.html>



全体会で開催趣旨を述べる上田理事・副学長



スミス氏による招待講演での質疑応答の様子

招待講演

「SDGs達成のための高等教育の役割」

AASHE理事、ポートランド圏RCEコーディネータ キンバリー・D・スミス

「リスク社会における不確実性を生きるための知識とは～チェルノブイリ後のドイツにおける市民の“方向性の知”に基づいて～」

フェリス女学院大学 准教授 高雄綾子

特別講演

「北海道大学におけるサステナビリティ教育の将来像」

サステナビリティ教育検討プロジェクトチーム長、副学長 山下正兼

指定討論者

ソウル大学校 師範大学長 チャンジョン・キム

東京大学大学院教育学研究科 准教授 北村友人

駐日スウェーデン大使館科学・イノベーション部 マッツ・エングストローム

駐日ノルウェー王国大使館通商技術部 シニアアドバイザー 松本 宏

総合博物館ツアー「持続可能な開発を『クール』に考えよう！－北極域展示室を通して－」

主催：北極域研究センター／実施責任者：大学力強化推進本部URAステーション URA 小俣友輝

7月にリニューアルオープンした総合博物館に、北極域研究センターの展示「いま最も『クール』な研究」が新設されました。北極域の人々の暮らし、陸や海・大気、グリーンランドの氷河に関する本学の研究、及び中谷宇吉郎教授の研究について、解説パネルと展示物が設置されています。

総合博物館ツアー「持続可能な開発を『クール』に考えよう！－北極域展示室を通して－」は、地球環境変動の影響を顕著に受ける北極域の課題や、研究成果を通じて「北極域や持続可能な開発目標と自分との関わり」「持続可能な開発目標に対する高等教育機関の役割」について来場者とともに考えることを目的として実施しました。

本企画の対象者は「SW10周年記念国際シンポジウム」の参加者やSWのwebサイトを通じて企画を知った国内外の幅広い層の方及び博物館来館中の北極域に興味のある方でした。北極域をフィールドとする本学大学院生が、

北極域の概要、それぞれの研究活動、持続可能な開発目標について解説し、アンケートを実施しました。海外の方5名を含む、学生、市民、企業関係者、教育関係者／研究者等の32名から回答がありました。北極域に関しては97%以上が、持続可能な開発目標に関しては85%が「少し以上は関係ある」と回答しました。時に質疑応答を交えつつ、北極域や地球規模で生じている様々な課題を、より自分たちに関係のある出来事と感じていただけたようです。

ガイドを務めた大学院生は、性別、年齢、国籍の異なる多様な参加者に対

して、フィールドで使用する器具を実際に手に取って見せるなど工夫を凝らし、一般的にあまり馴染みのない課題の共有に熱心に取り組みました。

参加者からは「博物館の展示において、インタラクティブなガイドツアーは新鮮」との声が聞かれました。また本学の多様なアクティビティをより広く深く共有するための手段として、博物館展示を利用した専門家によるツアーは非常に効果的との印象を持ちました。今後、国際連携機構、総合博物館とも継続的に連携し、互いに関係を発展させていきたいと思えます。



展示について説明する北大生とツアー参加者の様子



ツアー参加者の様子

市民セミナー&図書館ツアー「聞いて見て知る！国連の活動と北大図書館」

主催：附属図書館（国連寄託図書館）／実施責任者：附属図書館利用支援課 利用支援課長 樋口秀樹

附属図書館が国連寄託図書館として開催した2 Daysイベントの2日目の企画は、市民セミナー&図書館ツアー「聞いて見て知る！国連の活動と北大図書館」です。

前半は講師の国連広報センターの千葉 潔氏から、国連広報センターの概要、国連の現状、国連の広報活動の実際、国連寄託図書館の趣旨などの講話がありました。国連は現在、著名人の起用等による親しみやすい動画を用いた広報活動に力を入れており、これらの動画の紹介も複数あり、国連の取り組みについて映像と音楽で楽しめる内容でした。

後半は、附属図書館スタッフによる

千葉氏のお話を踏まえての図書館ツアーでした。国連などの国際機関の資料を集めた国際資料コーナーや、札幌農学校2期生であり国際連盟事務次長としても活躍した新渡戸稲造ゆかりの資料展示、地下の自動化書庫等の見学を行いました。新渡戸稲造の資料展示

では、図書館の資料だけではなく、大学文書館の協力により、新渡戸稲造が国際連盟の便箋を使った書簡のレプリカも展示しました。

参加者は、本学の学生1名と一般市民37名でした。市民の中には高校生や親子連れの方も多く含まれていま



千葉氏によるセミナーの様子



図書館ツアーの様子

た。イベント終了後に実施したアンケートでは、「国連のことをたくさん聞ける機会はなかなかないので、とても良い講演で、とても興味がわく内容

でした」といった声が寄せられました。図書館ツアーの後、高校生をはじめとする参加者との間で活発な質疑応答が交わされました。

附属図書館では、今後も国連の資料の収集・提供に加えて、国連のアウトリーチ活動に寄与するような講演会やセミナーなどを実施する予定です。

10月30日（日） 会場：学術交流会館第1会議室

SW10周年記念国際シンポジウム 分科会2-1

第10回HESDフォーラムin北海道

主催：HESDフォーラム／共催：教育学研究院、国際連携機構／実施責任者：琉球大学 教授 大島順子

HESDフォーラムは、ESDに取り組む高等教育機関がその実践等に関する様々な情報交換を行い、ESDの質の向上を図ることを目的として2007年に設立されました。この度、第10回HESDフォーラムをサステナビリティ・ウィークに合わせて開催しました。

大学セッションでは、5大学より事例報告がありました。まず、本学より「ESDキャンパス・アジアパシフィック・プログラム」の成果と展望について報告し、立教大学のESD研究所より、大学の附置機関を通したESD教育研究の可能性とESD研究所の10年間の取り組みについてのレビュー、徳島大学より、2000年以降多数の大学が取り組んだ文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の持続可能な社会につながる環境教育の推進について、採択を受けて実施したプログラム

の内容と実施後の展開が話されました。金沢大学からは大学のESDの取り組みのお話がありました。金沢大学は、様々な変遷を経ながら、現在もESDの関連科目を共通教育のレベルで展開している好事例の一つです。琉球大学からは文部科学省の展開する、地域の課題を解決するための「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」について、現状と課題の発表がありました。全体として、各大学が文部科学省からの様々な補助事業を受け、展開してきた／している取り組みの現状と課題、今後の方向性について、具体的な事例に基づいて忌憚のない意見交換ができました。

学生セッションでは、琉球大学と本学の学生による発表がありました。学生セッションは、大学側が目的を持って行っているものを学生はどう受け

取っているか、学生の目線をきちんと知らないという一方的なやり方になるのではないかという反省もあったため、昨年度より設けました。琉球大学は「エコロジカルキャンパス学生委員会」の活動を率直に学生目線で話しました。ボランティアであると同時に、単位付与されるキャンパスの中での活動という点が、非常に特徴的でした。本学は、双方向型の短期留学プログラムについて、写真を基に発表しました。

今後も、各大学の全学教育としてESDをどのように継続することが期待されているか、望ましいのかを率直に話し合うことができることを期待し、HESDフォーラムを継続していきたいと思えます。今回の発表内容は、HESDフォーラムのウェブサイトでも公開しますので、ぜひご覧ください。



大学セッションでの発表の様子



学生発表の様子

北欧とバルトの国々に学ぶサステナブルな高等教育の在り方

主催：ヘルシンキオフィス／実施責任者：ヘルシンキオフィス 所長 成田吉弘

2012月4月にフィンランドのヘルシンキに開設されたヘルシンキオフィスは、北欧を中心とした欧州全体の大学、研究機関との学術交流のリエゾン役を果たしています。また、FSP (First Step Program) や海外インターンシップなど、学生が欧州で海外体験をする際の手助けをしています。欧州は持続可能な社会実現に対する関心が深く、特に北欧はサステナブル社会の実現に貢献する教育でよく知られています。本企画では、サステナブルな高等教育に関して、先進的な取り組みをしている国々の現状を紹介する機会を設け、3人の講師をお招きしました。

はじめに、駐日ノルウェー王国大使

館の松本 宏氏より、ノルウェーの高等教育における持続可能な社会の実現のための試みが紹介されました。続いて、駐日スウェーデン大使館のMats Engström氏は、スウェーデンの高等教育において実施された先進的な試みと評価を詳細に話されました。バルト3国からの唯一の代表となったエストニアからは、Argo Kangro氏が、ノルウェー、スウェーデンとは異なる視点での持続的発展と教育を紹介されました。最後に、ヘルシンキオフィスの成田吉弘所長が欧州全体の高等教育の流れを総括した後、特にフィンランドの大学改革の歩みを紹介しました。

聴衆は約30名で、講演後に時間を超

えて、3人の外部講師へそれぞれ熱心な質問が投げかけられました。札幌で北欧やバルトの国々の高等教育、特に持続可能な社会実現に向けた試みを聞く機会はほとんど無いため、次年度以降もこうした企画の継続が期待されます。



講演終了後の記念撮影
(左から松本氏、Engström氏、成田所長、Kangro氏)

学生ワークショップ「大学生の挑戦！世界の目標を自分とつなげる」

主催：国際連携機構／共催：環境省北海道環境パートナーシップオフィス (EPO北海道)／実施責任者：環境省北海道環境パートナーシップオフィス 大崎美佳

本ワークショップでは、3名の学生が「SDGs (持続可能な開発目標)」を使った取り組みや自身の活動とSDGsの関わりを発表しました。

はじめにEPO北海道から、報告書「成長の限界 (1972年)」等に触れ、昔から世界の資源は有限であり、持続可能な社会を作っていくことが必要と言われてきたことを踏まえ、SDGsの経緯や特徴について紹介しました。

和田 恵さん (慶応義塾大学総合政策学部4年生)からは、所属する研究室での取り組みとして、SDGsを同世代の方へ普及啓発するためにSNSを活用した情報発信、シールにしたSDGs各目標を大学構内の関連箇所等に貼る「キャンパスSDGs」について紹介がありました。世界の目標を自分のこととして捉えてもらうための工夫を凝らした取り組みでした。三品未和さん (酪農学園大学環境共生学類2年生)、赤松遼太郎さん (東海大学札幌キャン

パス生物学部3年生)からは、学外の取り組みとして、2名が所属するNPO法人ezorockの「大雪山国立公園旭岳自然保護プロジェクト」と、SDGsの目標「質の高い教育をみんなに」「陸の豊かさを守ろう」との繋がりについて紹介がありました。また、登山者への長靴貸し出し等の活動一つひとつが、どのように自然保護と繋がっているのか活動の効果を丁寧に説明しました。

発表内容は、グラフィックレコードという手法を用いて、牧原ゆりえさん

(一般社団法人サステナビリティ・ダイアログ)、丸藤たつりさん (ユースコミュニティデザイナー) にまとめいただきました。参加者からは、「SDGsを身近に感じる事ができた」などの声があり、発表内容から多くの示唆を得ることができたようです。その後、参加者にはもう一つのワークショップ「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」へ続けて参加いただきました。



学生発表の様子



ワークショップの様子

10月30日(日) 会場：学術交流会館第1会議室

SW10周年記念国際シンポジウム 分科会3-2

対談「SDGsへ貢献する高等教育のあり方について」

主催：HESDフォーラム／共催：国際連携機構／実施責任者：徳島大学大学院理工学研究部 教授 三好徳和

「SDGsへ貢献する高等教育のあり方について」と題して、立教大学の阿部 治先生、金沢大学の鈴木克徳先生に対談をしていただく予定でしたが、参加者が10余名であったため、両先生に話題提供していただき、フロアーからの質問に答える形として実施しました。

まず、ESDに関して参加者全体での共通認識を作るためのディスカッションを行いました。資本主義社会における競争至上主義から、お互いが分かち合いながら安全安心な社会を作るためにはどのようにしなければならないのか、その価値観の変換を求めるものがESDです。高等教育機関としてはどのように実施していくかが課題となりま

すが、体験プログラムで地域問題を理解するという観点からすると、初等教育と高等教育では一見すると同じような中身かもしれませんが、ESDとしての深さが違い、高等教育では問題解決のための調査研究がなされます。ただ、そうすると、ESDは専門教育ということにならないでしょうか。ESDとして課題解決のための専門教育もありますが、ESDには、競争至上主義から、お互いが分かち合いながら安全安心な社会を作るために価値観の変換を求めるいわゆる「教養」も重要なことです。これらに関して、ディスカッションを行って相互理解に努めました。

SDGsに関しては、深く議論はでき

ませんでした。ポストESDとして、今後ESDを推進する高等教育機関が何を指すべきかという有用な議論が行えました。第10回目のHESDフォーラムとしては、次の10年に向けて総括を含めた良い議論ができたと考えています。



活発に意見交換をする参加者の様子

10月30日(日) 会場：学術交流会館1階ホール

SW10周年記念国際シンポジウム 分科会4-1

学生ワークショップ「学生目線で考えよう！よりよい世界の未来を担う高等教育どうあるべき？」

主催：国際連携機構／共催：環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO北海道）／実施責任者：環境省北海道環境パートナーシップオフィス 大崎美佳

本ワークショップでは、SDGsの達成に向け、より良い地域づくりのために高等教育がどうあるべきかを参加者と一緒に考えました。まず、自分たちの暮らしや実現したい夢が、SDGsのどの目標と関わりがあるのか考え、話し合う時間とおしてSDGsをさらに身近なものにしました。

次に、牧原ゆりえさん（一般社団法人サステナビリティ・ダイアログ）より、「サステナビリティ」実現に向けた考え方の紹介があり、SDGsの達成に向けて高等教育がどうあるべきか参加者と意見交換をしました。高等教育に期待することとして参加者からは、「学内外の方とつながることができるオープンな場所」「無駄なことに挑戦できる」「学生結婚の推奨・支援」「シラバスを教員と一緒に作成す

ること」等、多彩な意見が出てきました。また、高等教育が学びの部分で恵まれた場所であることを再認識した機会ともなりました。

最後に、大沼 進准教授（文学研究科）が全体を通して「活発なディスカッションがされ貴重な意見が出された」とまとめました。

参加者からは、「多様な意見が出たが高等教育に求めることは皆同じでおもしろい」等、普段は会えない人と意見交換する良い機会になったという声が多く寄せられました。

EPO北海道からは、今後も持続可能な地域づくりに向けSDGsの普及啓発を行うとともに、社会の次世代の担い手である学生の取り組みや意見が国内外へ発信される場づくり等をしていきたいと話がありました。



参加者の集合写真



ワークショップで議論する参加者の様子

講演会「コンフリクトを超える知を生み出す学び—分断社会における和解の可能性—」

主催：教育学研究院／実施責任者：教育学研究院 教授 宮崎隆志

SDGsに取り組む際に必ず浮上するのが、利害対立に起因する葛藤です。本分科会では、葛藤そのものに焦点を当てて、和解や赦しとしての平和を構築するために必要な学びを3つの事例に即して検討し、45名の参加がありました。

高雄綾子先生（フェリス女学院大学）からは、ドイツとポーランドの市民レベルの和解の模索の実践、佐々木陽子先生（南山大学）からはイスラエルの占領下にあるパレスチナのジェニン自由劇場での表現活動、上田假奈代さん（ココルーム代表）からは大阪の釜ヶ崎地区における表現による関わりづくりの活動を紹介していただき、本学の石岡丈昇先生（教育学研究院）がコメントを述べました。

討議では、マクロなレベルで語られ

る紛争解決としての「和解」ではなく、個人としての当事者間での「マイクロナ平和」に着目する必要性が確認されました。また、そのためには、第1に、分断社会の下で引き裂かれた状況にある個人の声を発することができ、その声が聴き取られる場を社会的に構築することが必要であること、第2に、それにもかかわらず、そのような場を組み込んだシステムが成立していない状況で、演劇のようなシミュレーションによって感情や関係性を取り戻す可能性に着目する必要があること、第3に、関係を固定化させないで揺らし続ける活動が重要であることが確認されました。

環境正義や地球市民という概念は、コンフリクトを解消するものとして語られることがありますが、本分科会で

はそれらを平和をもたらす「青い鳥」として扱うのではなく、むしろコンフリクトの持つリアリティから出発し、その矛盾と不断に対峙しながら問いを深める学びが重要であることが明らかにされました。教育学研究院並びに子ども発達臨床研究センターでは、このような課題をさらに多くの実践者とともに探求していくつもりです。



指定討論の様子

講演会「文化遺産とSDGs—失われた好機?—」

主催：応用倫理研究教育センター／実施責任者：応用倫理研究教育センター 准教授 眞嶋俊造

文化遺産保護の研究や教育における世界的権威であり、サステナビリティの倫理についての研究の第一人者である英国ニューカッスル大学のピーター・ストーン教授に、“Cultural heritage and the Sustainable Development Goals. A missed opportunity? (文化遺産とSDGs—失われた好機?—)”と題して講演していただきました。

国連「持続可能な開発目標 (SDGs)」にも掲げられているように、文化遺産・文化財の保護は現代社会において喫緊の課題であり、持続可能な社会を構築するために必要不可欠であることが指摘されました。また、文化遺産・文化財の保護を通じた持続可能な社会の構築に向けた課題と展望についての議論を深めました。

大学教員になる前にイングリッシュ・ヘリテージ財団に勤務し、ハドリアヌ

スの壁の管理責任者であったストーン教授の実務経験を踏まえた議論は、教育の重要性を強調するものでした。ストーン教授がこれまで行った、英国国防省より依頼されたイラク戦争における遺跡の損壊・破壊に関する調査、またユネスコにおけるリビア等での武力紛争における遺跡の略奪状況などの調査についての報告は、当事者でしか知ることができない非常に興味深い、また貴重な内容でした。歴史家であるストーン教授は「私達が歴史を学ぶのは現代を理解するためであり、また未来を創るためである」と強調されました。文化遺産や文化財を保護しそれらの歴史を学ぶことの重要性を論じることは、人性の涵養という持続可能な社会の構築について考えるという、まさに本シンポジウムの趣旨に合致するものでした。



講演を行うストーン教授



会場の様子

10月31日（月） 会場：学術交流会館小講堂

第2回北大－理研－産総研「触媒研究」合同シンポジウム －持続可能社会実現に向けたキャタリストインフォマティクス－

主催：触媒科学研究所／実施責任者：触媒科学研究所 教授 西田まゆみ

持続可能社会実現に向けた、キャタリストインフォマティクスの創成を目指している触媒科学研究所、産業技術総合研究所、理化学研究所が主催となり、第2回北大－理研－産総研「触媒研究」合同シンポジウムを開催しました。

昨年は理化学研究所を企画者として、第1回理研－北大－産総研「触媒研究」合同シンポジウム－知の発掘と革新触媒創造をめざすキャタリストインフォマティクス－が東京で開催され、キックオフも兼ねて各主催機関を代表する研究者が今後の触媒研究のあり方について講演を行いました。東京開催ということもあり、企業や官公庁からの出席者も多くみられました。

本年は、本学の触媒科学研究所が企画者となり、ドイツのフリッツ・ハーバー研究所やアメリカのSUNCAT Centerから講演者を招いて国際シンポジウムへと発展させ、キャタリストインフォマティクス創成のためのより具体的な研究について若手を含めて7名が講演を行いました。来場者は約120

名で、大変有意義なシンポジウムだったとの感想が多く寄せられました。

来年には産業技術総合研究所が企画者となり、更なるキャタリストインフォマティクスの発展を目指して第3回シンポジウムを関東にて開催する予定です。



講演者・参加者の集合写真



講演の様子

11月1日（火） 会場：学術交流会館小講堂、第1会議室

「サステイナブルキャンパス国際シンポジウム2016 －サステイナビリティの概念を取り込んだキャンパスマスタープランとは－

主催：サステイナブルキャンパス推進本部、施設部／
実施責任者：サステイナブルキャンパス推進本部 特任准教授・プロジェクトマネージャー 横山 隆

本シンポジウムは、今年で6回目の開催で「持続可能な大学と地域の発展のためのキャンパスの役割－サステイナビリティの概念を取り込んだキャンパスマスタープランとは－」をテーマに掲げました。サステイナビリティの概念について共通理解を深める方策として、キャンパスの機能及び物理的空間形成を計画するキャンパスマスタープランに焦点を当て、サステイナビリティの概念をキャンパスマスタープランに取り込む過程とサステイナブルキャンパス実現への道程を議論しました。山口佳三総長からは、ビデオメッセージ「キャンパスマスタープランについて議論して欲しいこと」の中で、「北海道大学近未来戦略150」で世界の課題解決に貢献する北海道大学となることを宣言したことや、地球の未来と北海道大学の未来とを同時に考えな

がら力を注いで欲しい、との考えが示されました。

基調講演には66名の参加があり、ミラノ工科大学のエウジェニオ・モレロ助教、九州大学の鶴崎直樹准教授、名古屋大学の恒川和久准教授、大阪大学の吉岡聡司准教授をお招きし、先進的なキャンパスマスタープランをまとめた事例を紹介していただきました。

続くワークショップでは、36名が5つのグループに分かれ、「北大キャンパスの重要課題を選定」して「北大の新キャンパスマスタープランに書くべきことを決定」し、「北大キャンパスの重要課題を解決する方策の提案」を具体的（計画実現のプロセス、方策、体制、キャンパスを活性化させるための仕組み、資金等）にまとめました。5つの発表では活発に質問も出ており、他大学の教職員、キャンパス計画

に携わる民間企業社員の方々と本学の教職員及び学生が協働する大変貴重な機会となりました。



講演者・スタッフの集合写真



ワークショップの様子

11月3日（木・祝） 会場：保健科学研究院E棟1階多目的室

保健科学研究院公開講座「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」

主催：保健科学研究院／実施責任者：保健科学研究院 教授 恵淑萍

保健科学研究院の公開講座は、「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」というテーマのもと、3名の講師陣が専門分野の紹介を行い、75名の参加がありました。

第1限目は、加藤千恵次教授が「老化を画像検査で見る」と題して、老化に伴う症状として、腰痛や関節痛から鬱症状、癌などを画像検査でどこまで診断できるかについて講演しました。

第2限目は、前島 洋教授が「高齢者の運動習慣によるヘルスプロモーション」と題して、高齢者における運動習慣は、運動機能の低下に加えて認知症の予防に対しても有効であることから、運動による広範な予防的効果の可能性について講演しました。

第3限目は、山内太郎教授が「伝統社会で暮らす人々のライフスタイルと健康～異文化フィールドワークの方法

と事例～」と題して、開発途上国の農村部など伝統的な生活を色濃く残している社会で暮らす人々の健康について、生活に密着したフィールド調査によって明らかにしていく方法論と事例について講演しました。

講演者は、サステナビリティ・ウィーク2016のキャッチコピー「『だれが』ではなく、『私たち』が『いつか』ではなく、『今』から世界の課題解決に貢献するために」から、「持続可能な



山内教授による講演の様子

社会づくりに向けた“世界の交流プラットフォーム”」をキーワードとして、保健科学の視点から講演しました。

参加者からは概ね好評を博し、様々な質問があり、各講師はわかりやすく丁寧に解説を行いました。今後も毎年、その時代を反映するようなテーマや、興味を持って参加いただけるようなテーマを設定して、公開講座を開催していく予定です。



質疑応答の様子

11月3日（木・祝） 会場：学術交流会館第1会議室

国際シンポジウム「東アジアにおける大学と先住民族との協業のあり方を探るー先住民文化遺産と考古学：台湾原住民とアイヌー」

主催：アイヌ・先住民研究センター／実施責任者：アイヌ・先住民研究センター 教授 加藤博文

先住民族の文化遺産の保存活用に考古学がどのように取り組むことができるか、また地域社会と連携した有効な取り組みの事例の国際比較をテーマとして議論を行いました。過去のシンポジウムでは、北米や北欧との比較を行ってきましたが、今年度は特に東アジアに焦点を絞り、先住民族との協業に取り組んでいる台湾と日本との事例比較を行いました。

台湾からの報告は、国立台湾大学、国立成功大学、国立台中教育大学の研究者による台湾での取り組みの報告でした。最初に本学と台湾側から東日本と台湾の概説的な報告を皮切りに、具体的な地域での取り組み事例についての報告を行いました。特に台湾の事例では、政権交代後の新たな先住民族の政策展開の中で、考古学の調査を通じ

た先住民族の文化遺産の確認と評価が先住民族の権利獲得に繋がる具体的な事例の報告があり、台湾で進みつつある新たな動きを学ぶ良い機会となりました。本学側の取り組みについては、伊達市の事例を報告し、日本側の新たな動きについての情報共有も可能となりました。

また、翌日には平取町へ場所を移し、アイヌ文化行政や文化振興に取り

組む自治体職員や地域住民を交えて討論を行うことができました。

内容的に身近で、交流頻度の高い東アジアでの事例の比較であったことを考えると、次年度以降は、一般向けのアナウンスに加えて、授業の一環としての開催など、より学生や留学生を巻き込んだ取り組みにするなどの工夫を行っていく必要があると考えています。



講演の様子



発表者の集合写真

11月4日（金） 会場：学術交流会館講堂

シンポジウム「高齢化するインフラにどう対応するかーインフラ維持管理・更新・マネジメント技術の社会実装ー」

主催：公共政策大学院／実施責任者：公共政策大学院 特任教授 高松 泰

公共政策大学院では、インフラ・アセットマネジメント・シンポジウム「高齢化するインフラにどう対応するかーインフラ維持管理・更新・マネジメント技術の社会実装ー」を開催しました。

冒頭のオープニング・トークでは、本学院の石井吉春教授（地域経済）、笠松拓史教授（地方自治・地方財政）、小磯修二特任教授（地域開発政策）、村上裕一准教授（行政学・技術政策学）が、各観点からの問題提起を中心に、ショートスピーチを行いました。

基調講演では、工学研究院の横田弘教授と慶應義塾大学理工学部の岡田有策教授から講演がありました。横田教授からは「インフラ維持管理・更新・マネジメント技術の現状と展望」と題して先駆的研究の動向や海外での実践例を、岡田教授からは北海道の地域特性に引き寄せながら「SIP『イン

フラ維持管理・更新・マネジメント技術』における出口戦略」についてお話いただきました。

シンポジウムの後半では、講演者2名のほか、行政機関等からもパネリストを迎え、高松 泰特任教授をコーディネータとするパネルディスカッションを行いました。北海道開発局建設部道路維持課長の坂場武彦氏、北海道建設部建設政策局維持担当課長の若山 浩氏、札幌市建設局土木部維持担当部長の渡辺和俊氏、国立研究開発法人土木研究所 寒地土木研究所寒地保全技術研究グループ長の熊谷政行氏から最近の取組みを紹介いただいた後、アセットマネジメント技術の社会実装について多角的な議論が交わされました。

会場には、自治体、道内の土木建設関係の民間企業、コンサルタント、一般市民の方々等、160名ほどが来場しました。今後は、室蘭工業大学、北見

工業大学の研究チームと協力し、各地でのワークショップ、研究開発にあたっていきます。



オープニング・トークの様子



パネルディスカッションの様子

11月4日（金） 会場：国際連携機構1階大講義室（111室）

留学希望者向けセミナー「SD on Campus」

主催：国際連携機構／実施責任者：文学研究科 教授 瀬名波栄潤

国際連携機構は、昨年に引き続き、留学希望者向けセミナーを実施しました。参加大学は、インドネシア・ガジャマダ大学、ベトナム・ベトナム国家大学ホーチミン校、フィンランド・東フィンランド大学、本学の4大学でした。学生の目線での情報提供を目的に、発表者を短期留学プログラム（HUSTEP）で交換留学している留学生等に依頼しました。

イベントでは、各大学がサステイナブル・ディベロプメント（SD：持続可能な開発）についてどのような教育を行い、学生が授業や授業外でSDにどのように関わっているかを発表してもらい、それぞれの特徴的な取り組みが紹介されました。

本イベントは本年度で9度目の開催で

すが、参加した学生に実施したアンケートでは「SDについて、また世界の大学がSDにどう取り組んでいるかについて詳細に知ることができ良かった」「英語でプレゼンを聞く良い機会になった」「社会の諸事情に目を向けるモチベーションになった」などの回答が見られました。また、発表した留



学生による発表の様子



会場の様子

11月6日(日) 会場：歯学部講堂

歯学研究科企画第8弾 お口の健康と歯科医療 その2ー患者サイドに立った知識の浸透ー

主催：歯学研究科／実施責任者：歯学研究科 講師 有馬太郎

歯学研究科では、市民公開特別講座として「お口の健康と歯科医療 その2ー患者サイドに立った知識の浸透ー」を開催しました。本講座はサステナビリティ・ウィークとの共催であり、また、道民カレッジ連携講座としても開催しています。前日から雪が降り、当日も雪が残るという悪天候となりましたが、32名が参加しました。

同講座では、食事を楽しむために必要なお口の健康と、問題が発生した場合の対処法・治療法について紹介することを目的として、一般の方でも十分理解できるわかりやすい言葉で3名の講師が講演を行いました。

歯学研究科長・歯学部長の横山敦郎教授の開会挨拶の後、歯学研究科の有

馬太郎講師から「唾液と摂食嚥下のメカニズム」について、一般社団法人北海道歯科衛生士会・札幌北楡病院歯科衛生士の原田晴子氏から「オーダーメイドのブラッシング」について、最後に北海道大学病院の後藤まりえ助教から「義歯を中心とした補綴治療の現状と義歯に関する留意点（清掃や食事の仕方）」についての講演が行われました。

本研究科では、今後も研究成果の地域社会への還元の一環として、道民カレッジ等に参加し、市民公開特別講座を企画・実施する予定です。またサステナビリティ・ウィークにも持続的に話題を提供していきます。



開会挨拶をする横山歯学研究科長



会場の様子

11月7日(月) 会場：総合博物館1階ホール(知の交流)

公開イベント「グリーンランドをめぐる『音楽』・『冒険』・『サイエンス』ー北極域の持続可能な未来にむけてー」

主催：低温科学研究所、北極域研究センター、THE MUSIC PLANT、ArCS北極域研究推進プロジェクト／
実施責任者：低温科学研究所 准教授 杉山 慎

日本の北極研究をリードする本学の取り組みを一般市民・学生に伝えるため、グリーンランドに焦点を当てたイベントを実施しました。本学からは、低温科学研究所の雪氷研究者、スラブ・ユーラシア研究センターの社会科学研究者がそれぞれグリーンランドの自然と社会の概要を紹介しました。その後、北海道を拠点とする冒険家、立本明広氏と奈良 亘氏によるトーク、

グリーンランド随一の人気を誇るバンド「ナヌーク」による演奏が行われました。最後はナヌークのメンバー2人を交えたパネルディスカッションを実施し、グリーンランドのサステナブルな将来について意見を交換しました。会場を埋めた約100名の参加者は、大学生から年配まで様々な方々でした。「科学」「冒険」「音楽」という3つのキーワードそれぞれに惹かれて、幅

広い年齢層が集まりました。各講演に関する熱心な質問が飛び、通訳を交えたパネルディスカッションの一問一答に大変良い反応がありました。休憩時間にはナヌークとイベント参加者との交流もあり、普段はなじみが薄いグリーンランド・北極・極域について身近に感じてもらえたと考えています。

7月に北極展示が新規オープンしたタイミングでもあり、今回のイベント



杉山 慎准教授によるオープニングの様子



グリーンランドの人気音楽グループ「ナヌーク」によるトークの様子



参加者との活発な質疑応答の様子

会場は総合博物館でした。シロクマのはく製や、グリーンランドを含む北極の写真を展示したコーナーはイベント内容に合っており、休憩時間を有効に

使って展示を見てもらうことができました。北極に力を入れる本学の良いアピールになったと感じます。今後も極域での研究活動を市民に伝えるため

に、研究以外の要素を取り入れた行事の開催を検討していきたいと考えています。

11月12日（土） 会場：高等教育推進機構S棟

JICA PARTNER 国際協力人材セミナー in 北海道 —国際協力の場で働きたい方、専門性を活かしたい方へ—

主催：国際協力機構（JICA）、国際部国際連携課／実施責任者：国際部国際連携課 国際協力マネージャー 榎本 宏

国際協力に関心がある、または国際協力の現場で活躍を目指す人材に対し、国際協力業界におけるキャリアの情報を提供して国際協力活動への参加を促すことを目的に、「国際協力人材セミナー in 北海道」を実施しました。当日は、63名の方が参加し、ほとんどが道内からの参加者で、大学生・大学院生が大半を占めました。

プログラムでは、「国際協力の全体像」として国際協力業界の動向について説明し、続いて国際協力の各組織・仕事の紹介及び、それぞれの活動事例やキャリア形成等について説明しました。その後、国際協力の各分野での経験者との意見交換を実施しました。

また、事前申し込み制の個別キャリア相談を実施し、13名が参加しました。参加者アンケートでは、52名中50名よ

り「非常に満足／満足」との回答があり、大変満足度の高いセミナーを提供することができました。参加者からは、「今回初めてこのようなセミナーに参加し、国際協力に関わる組織や手段に様々な種類があることを知った」「個別キャリア相談の開催もあり普段札幌ではチャンスが少ないのでとてもいい機会だった」「学生としてもっと経験

を積むためインターンに参加するという選択肢を知った。また、幅広い知識を習得するという、自分の課題を確認できた」などの声が寄せられました。

共催のJICA担当者は、JICAとしても参加者の熱意に触れ、引き続きより多くの北海道の人材に対して国際協力業界におけるキャリアに関する情報を提供したいと話しました。



熱心に聴き入る参加者の様子



セッションの様子

11月20日（日） 会場：学術交流会館講堂

第31回 ポテト杯争奪全日本学生英語弁論大会

主催：英語研究会／実施責任者：第31回ポテト杯争奪全日本学生英語弁論大会実行委員長 工学部3年 山元 爽

持続可能な社会の実現のために、社会問題やアイデンティティに関する問題など、様々な問題の解決方法を熱心に考える学生を招き、学生英語プレゼンテーション大会「ポテト杯争奪英語弁論大会」を開催しました。プレゼンターである10名の出場者は、全国の大学生約60名の応募の中から音声と原稿による審査を勝ち抜き、本大会への出場を決めました。

本大会は、学生サークル「英語研究会」が毎年開催しており、今年で31回目となります。入賞者には、ジャガイ

モ10kgが贈呈されますが、特に道外の大学からの参加者には毎年、好評をいただいています。

今年は、関西大学（2名）、高崎経済大学（2名）、慶応義塾大学、立教大学、青山学院大学、京都大学、早稲田大学、本学（各1名）が参加しました。優勝は早稲田大学の小島瑠莉さん、準優勝は京都大学の樋田祐一さん、3位は高崎経済大学の本間義人さんでした。

プレゼンテーションのテーマは、障害者に対するいじめ、リーダーの在り

方、両親の離婚に悩む子供の問題、認知症の本質の問題、病気との向き合い方、ほめることの大切さ、大学生の進



北大生を代表して発表した工学部2年生 奥田晃崇さん

路の選び方など、幅広い分野で発表されました。

観客は本学の学生に留まらず、他大生や卒業生など、様々な方が参加しました。大会後に参加者に行ったアンケートでは、特に学生の多くから「高いレベルの英語プレゼンテーションを聞くことができ、英語学習への意欲が高まった」「社会問題に関する関心が高まった」などという声がありました。

多くの学生が刺激を受け、グローバル社会へ意見を発信することの大切さを感じたようでした。

英語研究会では、更なるグローバル社会への関心、意欲を掻き立てるため、本学学生だけではなく他大学の学生と交流を図りながら、また審査員を含む多くの社会人との交流も大切にし、これからもこのような場を提供していこうと思います。



発表者の集合写真

11月26日(土)・27日(日) 会場：クラーク会館講堂

CLARK THEATER (クラークシアター) 2016

主催：北大映画館プロジェクト実行委員会／実施責任者：北大映画館プロジェクト代表 法学部3年 土橋一葉

学生や市民に開放した北大期間限定映画館「CLARK THEATER 2016」を開催しました。

当イベントは平成18年に始まり、今年で11周年になります。本学に常設映画館を作ることを目標に、その過程の一環として年に一度「CLARK THEATER」を開催しています。北大生を中心とする学生が運営し、作品の選定から自分たちで行いました。

今年は例年よりも日数を減らし、一つひとつの作品選定にこだわることで、普段であればなかなか見ることの

できない様々なジャンルの作品を上映しました。ジャンルはアニメからドキュメンタリーまで様々でしたが、幅広い年代の参加者に楽しんでいただきました。

平成28年11月に公開された映画「溺れるナイフ」で、独特の十代の少女を描き注目を集めている若手監督の一人、山戸結希監督には本学まで足を運んでいただき、トークショーを行いました。来場者にはトークショーを通じて、ただ映画を見るだけではわからないような、映画製作の背景も楽しんで

いただきました。

2日間を通じて、来場者には、映画作品そのものとの出会いはもちろん、そうした作品と出会える北大映画館プロジェクトがあることの魅力も伝えることができた実感しました。来年度以降も、多くの方に「CLARK THEATER」へ足を運んでいただき、ここでしか味わえない映画体験を提供するによって、映像作品との出会いや発見の喜びを感じていただけるよう邁進していきます。



当日の受付の様子



上映前の会場の様子

11月27日(日) 会場：国際連携機構106室(学生活動室) (インターネット配信)

GiFT2016—Global Issues Forum for Tomorrow—世界の課題解決に向けたフォーラム

主催：北海道大学／実施責任者：国際連携機構長 上田一郎

11月27日(日)に、本学の学生と世界の高校生・大学生が世界の課題解決についてインターネット上で意見交換を行うフォーラム「GiFT」を開催し、世界25ヵ国から228名が参加しました。

GiFTとは、「Global Issues Forum for Tomorrow」の頭文字であり、世界のどこに居てもサステナビリティ・ウィークに参加できるように開発された、ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)を駆使して提供する企画です。国際連携機構に設置したスタジオで行うパネルディスカッションの様子をYouTube Live(インターネット生中継)を通じて配信し、世界の若者がチャット機能を活用してパネリストと、もしくは参加者同士で意見を交換しました。スタジオには本学で学ぶ7人の留学生(中国、ヨルダン、イン

ドネシア、ネパール、フィリピン、スウェーデン)が集まり、司会役、議題紹介役、パネリスト役、そしてチャットを通じて送られてくる意見を紹介する役を交代で担いながら約2時間、2つの議題「How can we reduce our garbage?(ゴミはどうしたら減らせるか)」「What kind of actions are you taking to respond to the global warming?(地球温暖化に対しどのような行動を取っているか)」について英語で議論を進めました。パネリストと参加者は、各国や地域の状況や取り組みを紹介し合いながら、それぞれの場所で学生としてできることについてアイデアを活発に交換しました。

開催6回目を迎えたGiFTは、年に1回数時間開催する形態であるにも関わらず、世界各地から毎年参加するリピーターが生まれつつあります。今年

の参加地域は、パネリストの出身国はもちろんのこと、アメリカ、ブラジル、カンボジア、オランダ、ナイジェリア、ロシア、イタリア、ウズベキスタンなど過去最多となる世界25ヵ国・地域となりました。番組後半では、参加者から「北海道大学で学びたい」「北海道大学最高!」というコメントが幾つも送られ、本学の留学生が学修環境の良さをアピールする場面もありました。

GiFTは、「北海道大学近未来戦略150」で掲げた「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」というビジョンを体現し、各地に住む次世代の担い手に学び合う機会を提供することに留まらず、本学の存在と価値を世界へ知らせる有効なメディアに成長しつつあります。

◆アーカイブ動画

<http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gif/>


ライブチャットで世界各国から寄せられたコメントを紹介する司会学生の様子



生配信の様子



GiFT2016ウェブサイトの様子

12月3日(土) 会場：理学部5号館大講堂

HULT PRIZE@Hokkaido University

主催：HULT PRIZE 実行委員会／実施責任者：キャンパスディレクター 医学部3年 村上武志

HULT PRIZEは社会企業に関する国際学生ビジネスコンペティションであり、スウェーデンの起業家パーティル・ハルトの支援とアメリカ前大統領のビル・クリントンの後援によって2010年から開始されたコンペティションです。今では150以上の国から何千人もの出場者がHULT PRIZEに参加しています。

本大会では、世界中の学生がチーム

を組んで、世界に差し迫る問題を解決するアイデアでどれだけ社会に大きいインパクトを残せるかを競います。具体的には、参加者は100万ドルを元手にしてテーマとなる世界問題を解決するようなビジネス案を考え、プレゼンを通して競い合います。今年のテーマは「2022年までに1000万人に及ぶ難民の人権と尊厳を取り戻せるような持続可能で拡大可能な社会企業を立てられ



当日の受付の様子

るか」です。

参加者は、本学の学生15チーム、56人（日本人学生22人、留学生32人）と教職員・審査員・オブザーバー12人でした。各チームのプレゼンを通して、審査員による公平な審査の結果、3月にサンフランシスコかボストンで行われる地区大会に進む1チームを選抜しました。また、今回多くの学生が各専門分野の知識を持ち寄り、英語で意見交換をし、難民について深く考える機会を持ったことは、将来世界をまたに

かける北大生にとって有意義な時間となりました。

今後、HULTPRIZE実行委員会は、

3月の地区大会に向けて、優勝チームのプレゼンの改善支援、費用に係る準備などを行っていきます。



参加者の集合写真

12月18日（日） 会場：学術交流会館

一般公開フォーラム「シティズンシップと市民運動：LGBTをとりまく日本の事情」

主催：応用倫理研究教育センター／共催：法学研究科附属高等法政教育研究センター／
実施責任者：文学研究科 教授 瀬名波栄潤

本フォーラムでは、性的少数者（LGBT）の社会・公的認知の拡充方策の一つとして、「シティズンシップ」と「市民運動」を検証・展望しました。

2015年はLGBTムーブメント飛躍の年でした。5月にカトリック教徒の多いアイルランドで、同性婚の法制化が国民投票で決まりました。翌月、アメリカ合衆国連邦最高裁は、同性婚は「法の平等な保護」を定めた合衆国憲法の下での権利であるとして、同性婚を禁止する州法を違憲と判断、同性婚は合法となりました。特筆すべきは、2015年8月にオリンピック憲章根本原則6条に「性的指向」への差別撤廃が盛り込まれたことでした。

また、日本には、海外では10年以上も前に巻き起こっていた「同性パートナーシップの公的認証制度（同性愛者

等に、異性愛者間の婚姻制度に同等もしくは近い権利・機会を与える制度）」制定の波が押し寄せました。昨年来、渋谷区、世田谷区、宝塚市、那覇市、伊賀市などが制度の検討を終えて、すでに導入しています。民間企業も新しいサービスを模索し始めています。教育行政も新たな局面を迎え、文部科学省は性的少数者へ配慮を求める通知を全国の小中高校へ送るなどしています。

本年6月6日、ドメスティックパートナー札幌が「同性カップルを含む『同性パートナーシップの公的認証』に関する要望書」を秋元克広市長に提出しました。秋元市長は要綱による制度創設を検討することを明らかにしましたが、今後、性的少数者がシティズンシップを享受するには、行政や性多数者の理解を得るための様々な活動や

市民運動を有意義に行わなければなりません。しかしながら、表現の自由を許容する現代社会にあつて、それを制限する流れがあるのも事実です。

本フォーラムでは、LGBTをとりまく日本の諸状況を踏まえ、「シティズンシップ」と「市民運動」の可能性と課題について、3名の講師の発表とともに、来場者を交えて考え、多様な意見を交換しました。新田孝彦理事・副学長と山本文彦文学研究科長から、それぞれ開会式と閉会式に挨拶がありました。最後に、本フォーラムが持続可能な「私たちの街づくり」を探る新たな一歩となることを確認しました。来場者は約80名でしたが、当日は北海道新聞、読売新聞、共同通信から取材を受け、記事が掲載されました。



フォーラムの様子



講演者・関係者の集合写真

※計34企画のうち、11月2日（水）開催の「札幌国税局長 特別講演会『税務行政の現状と国税庁の取組』」は北大時報12月号に記事を掲載しています。

第19回北海道大学・ソウル大学校ジョイントシンポジウムを開催

11月24日(木)・25日(金)に、本学と韓国ソウル大学校とのジョイントシンポジウムを開催しました。両校の合同シンポジウムは、1998年より毎年交互

にホスト校となる形で開催しています。第19回となった今回のシンポジウムは、例年開催してきた全体会こそないものの、16部局から18の分科会が本学

を主会場として開催され、両校及び他校から総勢約600名が参加しました。

(国際部国際連携課)

分科会1

2016 International Workshop on New Frontiers in Convergence Science and Technology

2016コンバージェンス科学技術フロンティアに関する国際ワークショップ／情報科学研究科 教授 平田 拓

ソウル大学校Graduate School of Convergence Science and Technology (GSCST)と情報科学研究科がカウンターパートとなり、分科会を11月25日(金)にフロンティア応用科学研究棟で開催しました。今回は、ソウル大学校から教員6名と博士課程大学院生4名が来学しました。今井英幸情報科学研究科副研究科長の歓迎挨拶で分科会がスタートし、ソウル大学校の教員6名と、当研究科からは、ソウル大学校の教員と研究分野が近い教員6名がそれぞれ講演しました。講演内容は、ヒューマンコンピュータインタラクション、集積回路、生物情報、ナノ材料、分子イメージングなどでした。分

科会では、研究分野の情報交換や大学での教育や研究などについても話がはずみました。GSCSTは、ナノテクノロジー、ICT、バイオテクノロジーの分野に力を入れており、今回来学した教員も3つの分野に関係した研究を行っていました。講演に加え、ソウル大学校と当研究科の大学院生が研究紹

介と意見交換の会合を持ち、大学院生同士の交流も深めました。

今後も両研究科の交流を進め、学生の派遣や共同研究に結びつけていくことで意見が一致しました。次回はソウル大学校で再会することを誓い分科会を終了しました。



分科会開会時の教員集合写真

分科会2

2016 HU-SNU-NTNU-KU Joint Symposium for Science Education—New Horizon of Science Education in the 4th Industrial Revolution Era

2016 HU-SNU-NTNU-KU理科教育ジョイントシンポジウム～第4次産業革命期における科学技術の新しい地平／教育学研究院 教授 大野栄三

本分科会は本学で開催予定でしたが、海外ラーニングサテライトの授業をソウル大学校で行うことになり、分科会もあわせて、ソウル大学校で開催しました。ソウル大学校教育総合研究院・科学教育研究所のYoo Junehee教授のご尽力で、国立台湾師範大学(NTNU)とタイ王国カセサート大学

(KU)も参加した分科会となり、62名が参加しました。

4大学による拡大分科会は昨年引き続き2回目です。1日目はソウル大学附属中学校を見学し、2日目に分科会を開催しました。教育学大学長であるKim Chan-Jong教授の開会のスピーチ、4大学からの口頭発表、ポスター

セッションからなる充実した内容(遺伝子レベルの情報と教育の関係、on-line教育とoff-line教育の接続、ウェアラブル・デバイスや視線計測技術を使った学習過程の可視化、科学博物館や植物園の利用、ナノ科学とSTEAMなど)の分科会となりました。次回は、本学で開催する予定です。



ソウル大学校附属中学校訪問



分科会会場での記念撮影

分科会3

New Frontiers of Chemical and Pharmaceutical Sciences

化学系薬物の最前線／薬学研究院 教授 脇本敏幸

本分科会は、11月24日（木）に薬学部臨床薬学講義室において開催されました。

今回の薬学研究院分科会では「New Frontiers of Chemical and Pharmaceutical Sciences」と題し、薬学の中でも化学系薬学分野を主体とするシンポジウムを企画しました。本学からは有機系研究室の教員5名と大学院生（博士課程

1年）1名による6演題、ソウル大学校からは教員4名とポスドク2名による6演題の合計12題の講演がありました。講演内容は反応開発、天然物全合成、ケミカルバイオロジーなど多岐にわたり、いずれの講演もレベルの高い内容でした。参加者数は100名を超え、ほぼ満席の会場は熱気にあふれ、本学学部生・大学院生にとっても幅広

い化学系薬学分野の最先端研究に触れる貴重な機会になりました。また懇親会などを通じ、活発な意見交換が行われ、今後も引き続き交流を深めていくこと約束し、本分科会を終了しました。

来年度、ソウル大学校で開催予定の分科会のテーマについては今後、両大学の教員の間で検討を進めていく予定です。



分科会会場の様子

分科会4

Re-imagining East Asia in Tourism

ツーリズムからアジアを想像する／メディア・コミュニケーション研究院 准教授 金成攻

本分科会は、「Re-imagining East Asia in Tourism」をテーマに11月25日（金）にメディア・コミュニケーション研究院にて開催しました。本分科会には、ソウル大学校のMyungkoo KANG教授、Eun Young NAM専任研究員、本学の山田義裕メディア・コミュニケーション研究院長、西川克之教授、清水賢一郎教授、金成攻准教授、岡本亮輔准教授、周倩助教、奈良雅史助教、アメリカ・ジョージタウン大学のジョルダン・サンド教授、多摩大学の田中孝枝専任講師が参加し、講演と討論、進行を行いました。分科会は、山田研究院長の挨拶で始まり、「100年前の東京観光」「中国ムスリムにおける民族間の関係とその変容」「中国観光客の韓国観光と真正性をめぐる諸経験」の3つの発表と3名の討

論者による討論の順で構成されました。全体で27名の参加者があり、活発な議論がなされました。

シンポジウム前後のソウル大学校アジア研究所との会議では、今回の成果を今後ジャーナルや書籍の出版などの形で発信することで合意しました。またシンポジウム後の懇親会では、今後の共同研究の計画についてお話しする

とともに親睦を深めることができました。



口頭発表の様子



シンポジウムのポスター

分科会5

The 5th HU-SNU Joint Symposium on Materials Science and Engineering

第5回材料科学に関する合同シンポジウム／工学研究院 教授 橋本直幸

本シンポジウムは、ソウル大学校の Youngwoon KIM教授のご協力のもと、工学研究院材料科学専攻とソウル大学校工科大学材料工学科との間で開始され、3回目よりHeung Nam HAN教授を窓口とし、今回は11月25日（金）に工学研究院材料化学棟内大会議室において開催しました。ソウル大学校・本学双方から計10名の教員に、本学の大学院生・学部生20数名を加えて、計30

名以上の参加者となり、教員から材料科学に関する最新の研究が紹介されました。今回のテーマは“Microstructure-Property Relationship in Materials（材料における微細組織と特性の関係）”でしたが、それぞれの研究の応用範囲は幅広く、個々の専門を超えて活発かつ有意義な討論が行われました。発表された研究の中には類似の内容もあり、近い将来の共同研究につな

がる分野もありました。また、大学院生を中心にポスター発表も行われ、ソウル大学校・本学教授陣が審査した後、2名に優秀ポスター賞を授与しました。さらに、本学の新渡戸カレッジを念頭にいた学部生対象のインターシッピングプログラムの運用も積極的に進める方向で一致しました。本シンポジウムは、来年度はソウル大学校に場所を移して行われます。



Julalak YOOLERDさんが優秀ポスター賞を受賞



Pisanu PUNYAPORNさんが優秀ポスター賞を受賞



参加者集合写真

分科会6

The 12th Joint Symposium on Mechanical and Aerospace Engineering

第12回機械工学と航空工学に関するシンポジウム／工学研究院 教授 大橋俊朗

12月19日（月）・20日（火）に工学部において、分科会「第12回機械工学と航空工学に関するシンポジウム」を開催しました。シンポジウムは前週に積もった大雪が残る雪景色の中での開催となりました。本学側代表者の大橋俊朗教授、ソウル大学校側代表者の Prof. Seung Hwan Koが中心となり、教員による口頭発表（本学11件、ソウル大学校9件、モンゴル科学技術大学2件）及び学生によるポスター発表（本学7件、ソウル大学校4件）を行い、合計44名の参加者を得て盛況な会議となりました。流体力学、伝熱工

学、複合材料、ロボティクス、量子・プラズマ工学、マイクロナノバイオ、数値流体力学に関する幅広い研究分野の発表が行われました。1日目の夕方には機械知能工学科3研究室を見学す

るラボツアーを行いました。また昼食会及び懇親会を開催し、研究交流に加えて大いに親睦を深めることができました。当分科会は毎年開催しており、今後も継続する予定です。



1日目セッション終了後の集合写真

分科会7

Toward Understanding of Changing Environment

変わりゆく地球環境の理解に向けて／理学研究院 講師 佐々木克徳

本分科会では「変わりゆく地球環境の理解に向けて」というテーマで、計12件の研究発表を行いました。午前は環境科学院において本学の吉川久幸教授による歓迎の挨拶で始まり、大気海洋化学と地震学等についてのサブセッションを開催しました。サブセッションでは、本学から5名、ソウル大学から2名が各々の研究についての口頭発表を行いました。サブセッション終

了後、本学の研究室ツアーと総合博物館ツアーを開催し、本学の歴史や観測機器や実験装置についての見学を行い、交流を深めました。午後は理学研究院に会場を移し、気象学と海洋学に焦点を当てた後半のサブセッションを開催しました。サブセッションでは本学から3名、ソウル大学から2名が口頭発表を行いました。本分科会の最後には、ソウル大学のJeomshik

HWANG教授が、今年度の若手研究者・大学院生の活発な発表と討論への賛辞と、来年のソウル大学での分科会における再会を約束して閉会となりました。

本分科会では1日を通じて、20～30名程度の出席者がありました。今後とも両校の間の活発な交流を維持するよう努めていきたいと考えています。



分科会の集合写真



海洋溶存酸素変化について講演する見延庄士郎教授

分科会8

The 12th HU and SNU Joint Symposium on Mathematics - Mathematical Analysis and Applications/Algebraic Geometry and Topology -

数理解析と応用・代数幾何と位相／理学研究院 教授 相川弘明

数学関連の本分科会は今年で12回目となりました。今回は午前中の全体会議に続き、午後に2つのセッション「数理解析と応用」「代数幾何と位相」を開催しました。全体会議ではソウル大学、本学各1講演ずつ、「数理解析と応用」ではソウル大学5講演、本学4講演、「代数幾何と位相」

ではソウル大学、本学各4講演ずつの合計19の講演が行われました。

今回は専門に応じてパラレルセッションを設けるとともに、全体としての交流を図るため、エンレイソウでの昼食、午後のコーヒータム、夜の意見交換会を企画しました。12回目となる開催回数は分科会中最多であり、こ

うした研究集会を継続開催していくことの重要性が再認識されました。残念ながら全体会議は今回で終了しましたが、その分、自由な日程を組むことができるようになると思います。数学関連の分科会を今後も協力して開催していくことに多くの賛同が集まりました。



講演風景



参加者集合写真

分科会9

Otherness in Russian and Eurasian Contexts

ロシア・ユーラシアにおける他者性／スラブ・ユーラシア研究センター長 田畑伸一郎

本分科会は1月30日（月）に本学スラブ・ユーラシア研究センターにおいて、ソウル大学校ロシア・東欧・ユーラシア研究所との共催で開催しました。

今回のテーマは「ロシア・ユーラシアにおける他者性」で、国境を越えた人の移動や異文化接触などをテーマ

に、文学・言語・人類学・政治学などを専門とする10名の研究者・大学院生が報告を行いました。本学からは教員3名・大学院生1名、ソウル大学校からは教員3名・大学院生3名が参加し、また議論を実りあるものとするため、本学の教員4名が討論者の役割を

担いました。プログラムは、両大学の大学院生4名による第1セッション、移民と国際政治を扱う第2セッション、異文化表象や亡命文学を扱う第3・第4セッションを行いました。

分科会10

The Exploration for Change and Innovation of Teaching and Learning in Higher Education

教育学習の変化と革新のためのナビゲーション／高等教育推進機構 教授 細川敏幸

本分科会は11月25日（金）に高等教育推進機構情報教育館の共用多目的教室で開催し、延べ22名が参加しました。本学からは、重田勝介准教授がオープンエデュケーションセンターにおける、MOOCを利用した反転学習の試みについて紹介しました。亀野淳准教授はジェネリックスキルとしてのリテラシーやコンピテンシーの重要性から、その測定をおよそ700名の学生に実施した結果を説明しました。コンピテンシーを規定する要因には留学や海外旅行が認められました。

一方、ソウル大学校CTL（Center for Teaching and Learning）からはPark Jung Hee教授とHong Hae Li Naさんによりアカデミック・ライティン

グ指導についての説明がありました。CTLでは、毎年200～300名の指導が行われています。Seo Deog-JinさんはK-MOOCを利用したeラーニングのコンテンツ作成について説明しました。Lee Misukさんは学部生を対象にしたアカデミック・カウンセリングについて紹介しました。毎年延べ800件の相談があり、学業やうつ病など本学と類似の相談が寄せられているそうです。Yoon Hansolさんは学生による授業評価アンケートをもとに、キーワードによるコンテンツを分析した報告でした。授業の長所・短所をキーワードで導き出し、それを教員に還元し教育改善に役立てるもので、学生とのコミュニケーションが重要であることなど、

我々の結果とよく似ており興味あるものでした。

最後に、CTLセンター長のHa Soon-hoi教授が全体をまとめられ、多くの共通の課題があることから、今後も定期的に情報交換を行うことを約束して閉会となりました。



シンポジウムの様子

分科会11

4th HUH-SNUH-SHH Joint Symposium

第4回北海道大学病院—ソウル大学校病院ジョイントシンポジウム／北海道大学病院長 寶金清博

11月24日（木）・25日（金）に本分科会を開催しました。今回も昨年に引き続き、本院と部局間交流協定を締結している台北医学大学双和病院が特別参加しました。

分科会の前日には、北大病院ツアーとして、腫瘍センター、陽子線治療センターの見学を行い、本院の集学的・診療科横断的治療や、最先端のがん治療施設などについて紹介しました。その後の懇親会では終始和やかな雰囲気の中、専門分野を超えて情報交換がなされました。

分科会は寶金清博病院長、ソウル大学校病院のChang Suk Suh病院長、台北医学大学双和病院のMing-Te Huang副病院長による挨拶で始まり、「Recent Advances in Cancer Treatment（がん

治療の新展開）」というテーマのもと、「内科的がん治療の最新トピックス」「外科的がん治療の最新トピックス」「がんの診断と治療に関する最新トピックス」と題した3つのセッションから構成されました。3大学から多数の教員、医療関係者等の参加があり、各セッションの終わりには各大学での

特徴的な取り組みを踏まえた活発な質疑応答、意見交換が行われ、本分科会は豊嶋崇徳国際医療部長からの挨拶により盛会裡に閉会しました。

今後も両大学病院間の連携強化のみならず、3大学間の緊密なネットワーク構築によるさらなる発展が期待されます。



分科会参加者による集合写真



活発な議論の様子

分科会12

Advanced Veterinary Sciences: From Bench to Clinic

獣医学の最先端：基礎研究から臨床応用に向けて／獣医学研究科長 稲葉 睦

本分科会は、11月25日（金）に獣医学研究科講義棟第2講義室において開催しました。本学の山盛 徹准教授並びに大田 寛講師、ソウル大学校のKANG Kyung-Sun教授が司会を務め、獣医学研究科長の稲葉 睦教授並びにソウル大学校獣医学部長のKIM Jae Hong教授から開会の挨拶がありました。シンポジウムでは、本学から3名、ソウル大学校から3名の合計6名

の教員が講演を行い、最先端の獣医学研究及びその臨床応用展開について議論しました。各講演に対しては、獣医学研究科教員並びに大学院生から多くの質問が寄せられ、活発な質疑応答が行われました。シンポジウム後の昼食会では、今後のジョイントシンポジウム開催方法や将来の学生交流の実施の可能性について意見を交換しました。また、シンポジウム終了後には、大田

講師による獣医学研究科附属動物病院の案内が行われ、ソウル大学校の先生方に日本の小動物医療の現況を見学していただきました。

来年度以降は、大学院生による発表等も視野に入れ、引き続き最先端の獣医学研究をトピックに取り組んでいく予定です。本分科会の開催にあたりご尽力をいただいた両大学の皆様に、心よりお礼申し上げます。



質疑応答の様子



講演終了後の参加者の集合写真

分科会13

Local Governance and Public Policy in the Globalized World

グローバル時代における地方自治と公共政策／公共政策大学院 専任講師 池 炫周 直美

本分科会は、ソウル大学校行政大学院と公共政策大学院との初の交流を目的とする分科会として、セッションを2つ設けて11月24日（木）にシンポジウムを開催しました。

第1セッションでは、ともに少子高齢化が著しく進んでいる日本と韓国において社会福祉の現状やあり方、ソーシャル・キャピタルの活用などについて、所定の時間を超過するほど活発な議論が行われました。特に、日韓における若者の雇用問題や困窮した状況、高齢者の介護問題や孤独死、そして女性（特にシングルマザーなど）の貧困化などについて議論を進めました。第

2セッションでは、地方分権が進む両国において、最近の地方自治体や地方政府の動向について議論し、今後両国における地方自治の在り方や中央との関係について議論を進めました。

今回の分科会では、公共政策や地方自治に関する最新の議論を交わすことができ、今後交流をさらに深めて比較研究や共同研究などをすることも検討しました。



集合写真

分科会14

2016 Hokkaido University - Seoul National University Joint Symposium in Ophthalmology

第11回日韓眼科シンポジウム／医学研究科 診療准教授 南場研一

11月14日（月）に医学研究科中央研究棟3階セミナー室において、本分科会を開催しました。本学から教員7名、医員8名、大学院生4名、研修医3名、視能訓練士2名が、ソウル大学校からHyeong Gon YU教授、In Hwan CHO先生、Woon Hyung GHIM先生の3名が参加しました。開会の挨拶の後、本学の南場研一診療准教授による「原田病におけるインドシアニンググリーン蛍光眼底造影」についての講演、また、ソウル大学校Hyeong Gon YU教授による「眼内悪性リンパ腫」に関する講演が行われました。その後は各10分の演題が本学から6題、ソウル大学校から2題が発表されましたが、最新の話題や興味深い演題が多

く、活発な議論が行われました。同じアジアで臨床研究・基礎研究に真摯に取り組んでいる姿勢に、若い日本の眼科医も良い刺激を受けたことと思います。

シンポジウム後の懇親会では双方の眼科医療事情や生活習慣の違いなどについてお話しするとともに親睦を深め

ることができました。また、前日の13日（日）には、ぶどう膜炎の難治症例について症例検討会を行い、本学から2症例、ソウル大学校から2症例の提示がなされ、活発な討論をすることができました。

次年度はソウル大学校にて第12回日韓眼科シンポジウムを行う予定です。



参加者による記念撮影



懇親会にて記念撮影

分科会15

SNU-HU Joint Course: Environmental Chemicals and Human Health

協力講義：環境化学物質と人びとの健康／環境健康科学研究教育センター 特別招聘教授 岸 玲子

11月24日（木）・25日（金）に、本分科会を開催しました。3回目となる分科会は、初めて共同教育プログラムとして実施しました。ソウル大学校公衆衛生大学院からKyungho Choi教授、Kiyong Lee教授、Sungkyoon Kim教授、Chung Sik Yoon教授の4名に加えて、大学院生11名が来日しました。本学からは7名の教員が講義を行い、14名の大学院生が履修しました。履修生は、医学研究科、獣医学研究科、工学院、農学院、生命科学院、環境科学院、保健科学研究院に所属し、日本人に加えて中国、香港、スリランカ、バングラデシュ、インドネシア、マレーシア、エクアドル、エチオピアからの留学生が参加し、分野横断型かつ国際色豊かな講義となりました。自己紹介

及びオープニングとして環境化学物質による健康影響の問題提示に始まり、ソウル大学校及び本学で推進している環境化学物質曝露による健康影響に関する研究成果も含めた講義が提供されました。また、ソウル大学校生と本学大学院生から構成された5チームによる事前学習課題の成果が発表され、予

定の時間を超過して活発な質疑応答が行われました。

参加者による事後評価書では、概ね満足、この講義を勧めたい、と回答を得ました。特に、事前課題や懇親会も含め、両校の交流を深められたことがとても有益でした。次年度も引き続き分科会を開催予定です。



大学院生の発表風景



集合写真

分科会16

Joint Symposium on Hydro-environment Engineering

水文環境工学に関する合同シンポジウム／工学研究院 教授 清水康行

11月24日（木）に工学部において、本学の清水康行教授及びソウル大学校のIl Won Seo教授の協力のもと、本分科会を開催しました。分科会では、本学から4名、ソウル大学校から4名が研究発表を行い、議論を進めました。発表テーマは河川工学に関するもので、石狩川流域の治水の歴史、平成28年8月北海道豪雨災害の報告、軟岩河川の河床・流路変動特性、植生侵入に伴う河床・流路変動特性、汚染物質の河道内での拡散予測、清溪川（チョンゲチョン）における非特定汚染源負荷である大腸菌量の予測法など多岐にわたり、良い情報交換の機会となりま

した。

分科会終了後の25日（金）には札幌市内を流れる豊平川を見学し、札幌市豊平川さけ科学館、豊平川花魁淵の調査サイト、豊平峡ダムなどを巡るツアーを実施しました。参加者は15名で、本ツアーでは豊平川の治水、利水、発電、環境への取り組みなどを紹介しました。

懇親会では、このような情報交換を引き続き実施することとし、次年度、ソウル大学校における第20回ジョイントシンポジウムでの分科会開催が決められました。



シンポジウムでの集合写真



豊平峡ダムへのフィールドトリップでの集合写真

分科会17

Interdisciplinary Approach of 'Dream' in East Asia

東アジアにおける夢の学際的研究／文学研究科 教授 櫻井義秀

11月24日（木）にソウル大学校・本学の第4回社会学合同シンポジウムを本学で開催しました。昨年はソウル、本年は札幌で「夢」を共通のテーマにして日韓それぞれの課題を話し合いました。

日本側の演題は「NHK調査に基づく40年間の日本人の望み」「戦後日本の学生運動と宗教運動における社会変革の理念」「破れた夢－日本の中間層が抱く不安」、韓国側の演題は「東アジアにおける市民社会の構造と社会関係資本」「韓国における戦争記憶の乖離をいかに埋めるか」「詩が死んだ社会において詩人となる夢」でした。

期せずして日韓に共通する格差社会や夢を諦める若者世代の話が中心となりました。その後、ソウル大学校側か

ら韓国人の夢は中流生活の実現に留まるものではないこと、日本人の戦争の記憶が本土の空襲や広島・長崎の原爆など戦争の傷跡に留まり、朝鮮半島の35年に及ぶ植民地支配や南北分断の苦難への想像力を欠いた歴史修正主義の台頭に韓国人の恨（ハン）がうずくという発表があり深く考えさせられました。グローバル化する現代社会だから

こそナショナリズムが強まり、他者への寛容さと対話の用意を備えたローカリズムが必要ではないかと考えます。そのためには地理的に歴史的に関係の深い国々や人々が抱く記憶や夢を想像しながら、内閉的で屈折した愛国主義を内省的で開かれた愛国主義に転換していくべきでしょう。



集合写真

分科会18

Administrative Meeting for the Joint Symposium

ジョイントシンポジウムに係る実務者会合／国際連携機構長 上田一郎

11月24日（木）に、国際連携機構で、双方の国際担当部署による今後のジョイントシンポジウムに関する打合せが行われました。

来年度には20回に到達するソウル大学校とのジョイントシンポジウムは、

年々参加部局が増え、数百人という参加者を生む大学規模の催しとなっています。この関係性を維持する重要性を確認し、更に発展させていくにはどのような形態が可能であるか、国際担当部署の認識を共有しました。

今後は、これまでの参加部局への意向調査を踏まえ、継続的關係を維持しながら深化させられるよう進めていくこととなります。



会合風景

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報

基金累計額 (12月31日現在)

19,845件 3,399,345,178円

12月のご寄附状況

法人等5社、個人765名の方々から16,493,800円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、銘板の掲示、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。(五十音別・敬称略)

寄附者ご芳名 (法人等)

株式会社セコマ、寺田医院、北大サッカークラブ東京支部、北海道中央バス株式会社

寄附者ご芳名 (個人)

相川 忠弘	合川 正幸	縣 潤	浅野 賢二	芦田 庄司	池田 清治	石山 喬	石渡 英夫
入澤 秀次	岩下 明裕	岩永ひろみ	岩永未知代	岩永 力三	大久保盛厚	緒方 昭彦	小川 弘記
オズマ・ルイス・オミニ	小内 透	小原 大和	埴山 雅秀	笠間 茂	柏崎 博久	金岡 祐一	金川 眞行
川口 隆雄	河本 充司	菅野 三信	菊田 圭彦	小林 正司	斉藤 久	坂本 信行	佐久間一郎
桜井 謙介	櫻木 範明	佐藤 広文	佐藤 裕二	佐野 公昭	三升畑元基	実藤 俊也	渋谷 正人
清水 研一	清水 智之	白旗 修	瀬川 章	瀬名波栄潤	鷹野 正義	竹井 秀敏	田中 佐織
土家 琢磨	寺澤 睦	土井 良平	渡慶次 学	豊田 威信	永井 典久	長尾 敬志	中島 公博
長瀬 清	中村 一孝	中村麻里亜	原 正則	平井 喜郎	平石 千春	本間紀久雄	松本 修一
三浦 隆	水谷 洋一	三橋 智子	山内 隆嗣	山口 利昭	吉岡 正俊	吉田 広志	

銘板の掲示 (20万円以上のご寄附)

(法人等)

株式会社セコマ

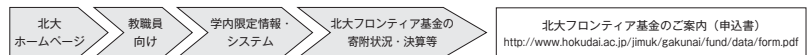
(個人)

相川 忠弘、岩永ひろみ、緒方 昭彦、佐久間一郎、櫻木 範明、瀬川 章、竹井 秀敏、中島 公博、長瀬 清、中村 一孝、平石 千春、本間紀久雄、三橋 智子

ご寄附のお申し込み方法

① 給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。



② 郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部署事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

④ クレジットカードでのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ (<http://www.hokudai.ac.jp/fund/form.html>) のクレジットカード寄附申込フォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室 (事務局・学内電話 2017)

(総務企画部広報課)

平成29年度予算案（本学関係分）の主要事項

平成29年度予算案（本学関係分）の主要事項は、次のとおりです。

事 項	摘 要
(平成28年12月22日閣議決定)	
【機能強化経費】	
○機能強化促進分	19件
○全国共同利用・共同実施分	11件
○教育関係共同実施分	5件
○設備サポートセンター分	1件
○附属病院機能強化分	1件
○寄附金等外部資金活用促進経費	1件
○数理・データサイエンス教育強化経費	1件
	計39件 内訳は次頁のとおり
【施設整備事業】	
○環境資源バイオサイエンス研究棟改修 施設整備等事業（PFI事業14-13）	〈（12,940㎡）〉
○獣医学研究科動物施設 〈国債2-2〉	〈 1,490㎡〉
○工学部機械棟 〈国債2-1〉	〈 3,300㎡〉
○基幹・環境整備（給水設備等）	
	※ 〈（ ）〉 は全体改修面積, 〈 〉 は全体新営面積を表す。

平成29年度機能強化経費内訳

【機能強化促進分】

事 項	部 局 等 名	事業期間
<p>[戦略①] 持続可能社会の実現に向けた世界トップレベル研究推進・社会実装</p> <p>次世代省エネを指向した強発光性の希土類錯体ポリマー開発 -新規エレメントカップリング反応を鍵とするフォトニック錯体工学拠点の形成-</p> <p>次世代ポストゲノム科学を活用した早期診断・予防法の実証的展開研究教育拠点の形成</p> <p>ソフト&ウェットマテリアルが拓くライフイノベーション -高分子材料科学と再生医学の融合拠点形成-</p> <p>量子医理工学による創造的医療研究 -再発の心配のないがん治療への挑戦-</p> <p>人獣共通感染症克服に向けたイノベーション創出</p>	<p>工学研究院, 理学研究院, 総合化学院, 地球環境科学研究院, 創成研究機構</p> <p>先端生命科学研究院</p> <p>創成研究機構, 先端生命科学研究院, 医学研究科</p> <p>国際連携研究教育局 (GI-CoRE), 医学研究科</p> <p>国際連携研究教育局 (GI-CoRE), 人獣共通感染症リサーチセンター</p> <p>アイヌ・先住民研究センター</p>	<p>H28~H30</p> <p>H28~H29</p> <p>H28~H29</p> <p>H28~H30</p> <p>H28~H30</p> <p>H28~H33</p>
<p>[戦略②] 最先端の国際連携研究拠点の構築と、次代を担う人材の育成</p> <p>世界の課題解決に貢献するグローバル頭脳循環拠点の構築</p> <p>ソフトマター国際連携研究教育拠点の構築：ソフトマター国際大学院の設置に向けて</p> <p>ビッグデータとサイバーセキュリティの分野融合研究拠点の構築とITトップ ガン人材の育成～最先端研究と新学院構想～</p> <p>札幌農学校の伝統を活かしたパイオニア人材教育機能の強化</p>	<p>国際連携研究教育局 (GI-CoRE), 医学研究科, 人獣共通感染症リサーチセンター</p> <p>先端生命科学研究院</p> <p>情報科学研究科</p> <p>農学研究院</p>	<p>H28~H31</p> <p>H28~H32</p> <p>H28~H33</p> <p>H28~H31</p>
<p>[戦略③] 国際社会の発展に寄与する指導的・中核的人材の育成</p> <p>「観光メディア学院 (仮称)」設置を目指して ～異分野融合型教育による新たな観光創造人材の育成へ向け</p> <p>持続的資源系人材育成プログラム</p> <p>難治性疾患に立ち向かうバイオ融合医薬開発をモデルとする人材育成プラットフォーム構築</p> <p>死因究明等を担う法医学的知識を有する人材育成プラン</p> <p>熱帯アジア新興農業地域における生産基盤開拓新技術の現地教育研究拠点形成 -主体的な学びと社会実装をめざした北大伝統の研究資産の再統合-</p>	<p>メディア・コミュニケーション研究院</p> <p>工学研究院</p> <p>薬学研究院, 医学研究科, 遺伝子病制御研究所</p> <p>医学研究科</p> <p>農学研究院</p>	<p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p> <p>H28~H29</p> <p>H28~H32</p> <p>H28~H32</p>
<p>[戦略④] 4つの基本理念に基づく多様な人材育成のための全学的教育システム改革</p> <p>オープンエデュケーションを活用した先進的教育改革の拠点 (オープンエデュ ケーションセンター) の機能強化</p> <p>未来型人材育成選抜試験の開発</p> <p>戦略的高度人材育成IR推進事業～高度教学IRセンター (仮称) 構想</p>	<p>高等教育推進機構</p> <p>高等教育推進機構</p> <p>高等教育推進機構</p>	<p>H28~H31</p> <p>H28~H32</p> <p>H29~H33</p>
<p>[戦略⑤] 国内外の地域や社会の活性化及び新たな価値の創造に貢献</p> <p>博士人材キャリア構築支援プラットフォームのグローバル化事業 -世界から集まる優秀な博士人材が日本及び世界で活躍するためのグローバ ルなキャリア支援を目指して-</p>	<p>人材育成本部</p>	<p>H28~H33</p>
合 計	19件	

【共通政策課題分】

<全国共同利用・共同実施分：拠点認定分>

事 項	部 局 等 名	事業期間
<p>低温科学研究の推進 -学際的・分野開拓型低温科学の新展開-</p> <p>感染症の先端的共同利用・共同研究の推進</p> <p>エネルギー・資源シフトを実現する触媒科学のグローバル共同研究拠点事業 -持続可能社会実現のための触媒科学研究拠点構築と人材育成-</p> <p>スラブ・ユーラシア地域研究にかかわる拠点</p> <p>人獣共通感染症研究拠点基盤事業</p> <p>北極域研究の推進 -異分野連携による革新的展開-</p>	<p>低温科学研究所</p> <p>遺伝子病制御研究所</p> <p>触媒科学研究所</p> <p>スラブ・ユーラシア研究センター</p> <p>人獣共通感染症リサーチセンター</p> <p>北極域研究センター</p>	<p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p>
計	6件	

<全国共同利用・共同実施分：プロジェクト分>

事 項	部 局 等 名	事業期間
<p>人・環境と物質をつなぐイノベーション創出ダイナミック・アライアンス</p> <p>血管を標的とするナノ医療の実用化に向けた拠点形成 -がんを始めとする国民病を血管から治療する-</p> <p>統合物質創製化学研究推進機構</p> <p>感染症制御に向けた研究・人材育成の連携基盤の確立 -人獣共通感染症克服に向けたイノベーション創出と地球規模の感染症対策-</p> <p>北極域の持続可能性の実現に向けたイノベーション創出 -ロシア拠点を核とした産官学連携と人材育成-</p>	<p>電子科学研究所</p> <p>遺伝子病制御研究所, 薬学研究院, 北海道大学病院</p> <p>触媒科学研究所</p> <p>人獣共通感染症リサーチセンター</p> <p>北極域研究センター</p>	<p>H28~H33</p> <p>H28~H30</p> <p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p> <p>H28~H33</p>
計	5件	

<教育関係共同実施分>

事 項	部 局 等 名	事業期間
水産科学・海洋環境科学教育推進のための練習船プログラムの普及と中核的拠点の展開	水産学部	H28～H32
食糧基地、北海道の水圏環境を学ぶ体験型教育のための中核的拠点形成 ～多様な水産資源を育む環境でのフィールド教育～	北方生物圏フィールド科学センター	H28～H31
FSDS共同推進事業 ～PFUプログラムによる大学リーダーの養成～	高等教育推進機構	H28～H31
フィールドを使った森林環境と生態系保全に関する実践的教育のための中核的拠点形成	北方生物圏フィールド科学センター	H29～H33
寒流域における海洋生物・生態系統合的教育の国際的共同利用のための中核的拠点形成	北方生物圏フィールド科学センター	H29～H33
計	5 件	

<設備サポートセンター整備>

事 項	部 局 等 名	事業期間
グローバルファシリティセンター ～先端機器共用促進・グローバル技術支援人材育成拠点構築～	創成研究機構	H28～H30
計	1 件	

<附属病院機能強化分>

事 項	部 局 等 名	事業期間
附属病院における医師等の教育研究診療基盤充実支援経費		
計	1 件	

<寄附金等外部資金活用促進経費>

事 項	部 局 等 名	事業期間
寄附金等外部資金活用促進経費		
計	1 件	

<数理・データサイエンス教育強化経費>

事 項	部 局 等 名	事業期間
数理・データサイエンス教育強化経費		
計	1 件	

(財務部主計課)

平成28年度北海道大学ユニバーシティ・アドミニストレーター育成講座を実施

総務企画部人事課では、本学事務職員の一層の人材育成を図るため、「北海道大学ユニバーシティ・アドミニストレーター育成講座」を実施しました。

本育成講座は、事務職員の企画力を醸成し、総長ガバナンスを推進する体制を強化するとともに、総長室及び運営組織等における教員との協同体制を充実させることを目的としています。

内容は、初回の9月28日（水）の徳久治彦理事・事務局長による「ユニバーシティ・アドミニストレーターに求められるもの」と題した全体講義を

皮切りとして、受講生3名からなる3つのグループ（学務、研究支援・推進、国際）ごとに関係する事務局の部長が指導担当に当たり、本学のケーススタディについて紹介を各々受けた後、受講生による新たな企画提案プロジェクトへの取組を検討させ、最終日に役員等へのプレゼンテーションを行うものです。

各グループとも講座の中で4～5回の検討機会を設けたほか、講座時間外においても受講生が自主的に情報収集を行うなど、本学が課題とする内容に積極的に取り組みました。また、昨年

度の受講生がその経験を活かしてサポート役として参画し、グループ別検討はより充実したものとなりました。

12月22日（木）の最終回には、山口佳三総長をはじめ理事並びに事務局の部課長等が多数聴講する中、各グループがそれぞれ企画したプロジェクトのプレゼンテーションを行いました。各グループとも全員が協力して検討してきた成果を発表したほか、理事などからの質問等に対して受講生が回答する形で、活発な意見交換が行われました。

（総務企画部人事課）



全体講義（徳久理事・事務局長）



受講生によるプレゼンテーション



熱心に聞き入る山口総長をはじめとした聴講者

第2回HUCIフォーラム「海外大学との英語による協働教育をどう進めるかー学内の好事例と今後の課題」を開催

大学力強化推進本部の主催で、12月1日（木）にクラーク会館において、第2回HUCIフォーラム「海外大学との英語による協働教育をどう進めるかー学内の好事例と今後の課題」を開催し、68名の教職員が参加しました。HUCIフォーラムは、北海道大学コミュニティにおける対話を促すことにより、「Hokkaidoユニバーサルキャンパス・イニシアチブ（HUCI）」が目指す「10年後の姿」の達成をより確かなものにするを目的としたものです。

10月に引き続き2回目の開催となる今回は、海外との協働教育、英語による教育の量的拡大並びに質的充実を図るべく、学内の先駆的な実践事例から

学ぶとともに、全学的に取り組んでいく課題の抽出を目的としました。

フォーラムは、上田一郎理事・副学長及び田浦宏己文部科学省国際戦略分析官による開会挨拶で始まり、引き続き上田理事・副学長による開催趣旨説明の後、山下正兼副学長をはじめ7名の教職員による講演が行われました。

後半では、山本堅一准教授をモデ

レーターに、講演者によるパネルディスカッションが行われました。意見の異なるパネリストの存在や、外国籍の教職員による会場からの発言が議論を活性化させ、学内対話の重要性が改めて認識されました。

新田孝彦理事・副学長による閉会挨拶では、協働教育の一つの理想的な形が水産科学院と教育学院から提示され



田浦国際戦略分析官による挨拶



パネルディスカッションの様子

たことや、現在は専門教育と研究に限定されている大学院教育の改革の必要性について認識が示され、フォーラムは終了しました。

なお、フォーラムの様子を北海道大学YouTubeチャンネルで公開していますので、当日参加できなかった教職員の皆様はぜひご覧ください。

◆<https://www.youtube.com/watch?v=p3z4HdskS8&list=PLIGmp1Iqdh14a5YNrvByMnFwPm3AaO-Qe>

(国際部国際企画課)

ワークショップ「学生の思考を深め、発言を促すための問いかけと場づくり」を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、教職員に対するFDの一環として、12月9日(金)に高等教育推進機構S5講義室において、ワークショップ「学生の思考を深め、発言を促すための問いかけと場づくり」を実施しました。

本ワークショップは、学校教育の場における効果的なカリキュラムの編成や授業のあり方について研究を進めている滋賀県立大学人間文化学部の木村 裕准教授を講師にお招きし、学生の思考を深め、発言を促すような問いかけを行うための「問いのたて方」とそのような場づくりについて学び、自身の授業ではどのような問いかけ・場づくりを行うことが適切なのかを考えることを目的として6月に引き続き実施したもので、道内大学等の教職員14

名が参加しました。

本ワークショップは、講師の木村准教授から、発問の位置づけや発問作りの際の注意点等について説明があり、質問と発問の違いを理解して意図的・計画的に発問を行うことの重要性を学び、参加者はそれらをグループ学習で体験しながら身につけることができました。

事後アンケートでは、「話し合い活動を組み入れ、先生も話しやすい温か

い雰囲気を出されていて良かった」「学習する、教えるということはこういう順序でどうなってほしいのかという基本が改めて整理された」等の意見が見られ好評でした。

高等教育研修センターでは、今後も教職員を対象とした様々な研修を開催する予定ですので、積極的にご参加願います。

(高等教育推進機構)



講演の様子



グループワークの様子

「英語によるアカデミック・プレゼンテーションの基礎」を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、教職員に対するFDの一環として、12月12日(月)及び19日(月)に高等教育推進機構等において「英語によるアカデミック・プレゼンテーションの基礎」を実施しました。

本研修は、研究のアウトリーチ活動の幅を広げるために重要な一つの要素である、英語によるプレゼンテーション能力の基礎を学ぶことを目的として実施したもので、道内大学等教職員延べ61名が参加しました。

研修は、講師として、研究者の学術論文の校正、学会発表準備や海外赴任前の英語研修などを担当している株式会社トムからPeter Lambert氏を招き、英語でプレゼンテーションを行う際の注意点及びいくつかの発表スタイルについて講演があった後、参加者同

士によるディスカッションなどを通じてプレゼンテーションについて学ぶという内容で進められました。実践中は講師が一人ひとりに丁寧に助言をして回っており、参加者にとって貴重な機会になったと思われます。

事後アンケートでは、「Q&Aへの対応方法が非常に参考になりました」「プレゼンテーションについて留意すべき基本的な事柄を教えていただいたが、基本こそ大切だと再認識できました」等の意見が見られました。

高等教育研修センターでは、今後も教職員を対象とした様々な研修を開催する予定ですので、積極的にご参加願います。

(高等教育推進機構)



講演の様子



ワークショップの様子

「シラバスのブラッシュアップ研修」を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、教員に対するFDの一環として、12月17日（土）に高等教育推進機構S3講義室において「シラバスのブラッシュアップ研修」を実施しました。

本研修は、次年度のシラバスを提出する前に、今一度自身のシラバスを振り返り、学習者の学習をさらに促す内容にブラッシュアップすることを目的としたもので、道内大学等の教職員16名が参加しました。

研修では、講師である高等教育推進機構高等教育研修センターの山本堅一特任准教授から、シラバスの意義や作成手順などについて説明があった後、各参加者が持参した来年度のシラバスについて目標・評価・計画の3項目を

順にブラッシュアップしていき、他の参加者と色々な意見交換をしながら進められました。

参加者からは「昨年も参加させていただきましたが、今年も大変、シラバス作成の参考になりました」「多様な科目を担当する先生方のお話を聞くことができ参考になりました」などの意

見が出ており、非常に有意義な研修になりました。

高等教育研修センターでは、教職員を対象とした様々な研修を開催する予定ですので、積極的にご参加願います。

（高等教育推進機構）



研修の様子

第2回鮮度保持技術シンポジウムを開催

12月5日（月）、工学部フロンティア応用科学研究棟鈴木章ホールにおいて、産学・地域協働推進機構主催で第2回鮮度保持技術シンポジウムを開催しました。会場には食品関連、流通、商社などの企業関係者、道内研究機関、公庁など、幅広い業種から132名の参加がありました。

今回は、食料基地北海道のキーテクノロジーとなる鮮度保持技術にフォーカスしました。日本で唯一の「食品冷凍学研究室」をもつ東京海洋大学からは鈴木 徹教授の冷凍技術、東北大学からは佐藤 實教授の低周波マイクロウェーブを使った冷凍食品の解凍技術など、国内第一人者による最先端の技術を紹介しました。道内からは、水産科学研究院の今野久仁彦特任教授より、水産物の鮮度保持・保存に関する研究について、また、北海道立総合研究機構の長尾明宣農業環境部長からは農産物の保存技術について、それぞれ発表がありました。いずれも参加者が注目するテーマで、会場からは多くの

質問が寄せられました。

当シンポジウムは、「食科学プラットフォームセミナー」の一環であり、“食（生産、加工、流通）”を重点テーマとして産学官の研究者等、関係者が自由闊達に意見交換できる場を提供していきます。

本セミナーは、安全・安心で高品質な「食」に恵まれた北海道において「農業」「漁業」「食品加工」分野のプロジェクト創成を目的とした、産学官のプラットフォームとして機能する

ことを目指し、定期的で開催しています。セミナーの事務局は産学・地域協働推進機構が担っていますが、今後も皆様の期待に応えられるよう、新たなプロジェクト形成に向けて、関係者のご協力を得ながら具体的な成果の創出を目指していきます。

本セミナーに興味のある学内研究者は、お気軽にお問い合わせください。

◆jigyo@mcip.hokudai.ac.jp

（産学・地域協働推進機構）



各講師を交えた総合討論

小中学生向け科学体験イベント「さっぽろサイエンスフェスタ2016 in 北大」を開催

人材育成本部女性研究者支援室は、小中学生向け科学体験イベント「さっぽろサイエンスフェスタ2016 in 北大」を12月17日（土）に学术交流会館で開催しました。このイベントは2012年から開催しており、今回で5回目となります。本イベントは地域の子どもや保護者に大学の研究や科学の楽しさ・幅広さに触れてもらうとともに、学生や研究者のアウトリーチ活動の場の一つとして、また、理系を志す高校生と大学生や研究者の交流の場として、地域で科学イベント等を実施するNPO法人butukuraと共催で企画・運営を行っています。このイベントの特徴は「実際に研究を行っている学生や研究者による、来場者のレベルに合わせた科学的説明」「学生や研究者に加え、高校科学部等生徒によるブース出展」「大

学出展スタッフと高校生スタッフの座談交流会」です。

今回のイベントでは学内の理系8部局から参加した学生や研究者の有志64名が「理系応援キャラバン隊」として11ブース、札幌市及び滝川市の高校生56名が8ブース、企業が1ブースの計20の科学体験ブースが出展されました。「理系応援キャラバン隊」のブースは高度な研究内容を小学校低学年でも楽しく体験出来るよう工夫されており、また、高校生のブースは簡単な科学工作や体験が中心となっていて、どちらも小学校低学年から大人まで興味深そうに体験していました。農学部森林科学科森林生態系研究室が出展した「歩いて発見！すごろくの森」では、小講堂全体をすごろくに例え、サイコロを振って止まったマスに書いてある

問題を解きながら進むという作りとなっており、人気を博していました。

一般公開終了後には、出展した高校生と大学生・研究者が交流する座談会を行いました。大学生生活の現実や受験勉強について語られ、高校生はもちろん大学生からも好評でした。今回のイベントに参加するような意欲ある高校生に本学を目指して欲しいと思います。

来場者数は子ども540名、大人435名と過去最高となりました。さらに来場者数を増やすには出展ブース数や会場のキャパシティなどの課題を解決する必要がありますが、今後もより良い実施形態を模索しながら継続していきたいと思います。

（人材育成本部）



理学部生物情報解析科学研究室のブース



北海道大学病院のブース



座談会の様子

人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで 第30回「赤い糸会&緑の会」を開催

人材育成本部のS-cubicでは、12月2日（金）に学術交流会館にて本年度第2回「赤い糸会&緑の会」を開催しました。

本会は、企業と若手研究者（DC、PD）との直接情報交換会であり、企業には若手研究者の高い専門性や総合力を理解いただき、若手研究者には企業の研究開発活動や企業における博士の活躍状況等を知ってもらうことで、相互理解を深め、視野の複線化、活躍フィールドの拡大を図ることを目的としています。

今回で「赤い糸会&緑の会」は通算30回目の開催となり、若手研究者の参加も回を重ねるにつれ増加し、10部局から42名（DC：40名、PD：2名）、また、平成26年度末より採択された「科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業」で、東北大学から3名の若手研究者、さらに本学と個別連携しているお茶の水女子大学から2名、横浜国立大学から1名の若手研究者が参加しました。企業からは、各種業界か

ら16社（33名）、オブザーバ企業1社、オブザーバ大学3校、総勢40名の参加がありました。

本会では、冒頭の人材育成本部長の望月恒子教授による開会挨拶、赤い糸会担当の樋口直樹特任教授による趣旨説明の後、参加企業の皆様から業界動向や博士の活躍状況等の紹介が行われ、その後、若手研究者の自己紹介ポスター発表、企業ブースを訪問しての個別情報交換等が活発に行われました。

さらには、この「赤い糸会&緑の会」を通じて企業に就職した若手研究者の先輩方が今回は5名も企業説明会に参加し、後輩達に対して熱い思いを語ってくれました。

開催後の企業側のコメントから、「非常に有意義なイベントでした。個人的にも刺激を受けました」「自分が参加していた頃よりも、運営側、学生側含め更にブラッシュアップされていた」との声をいただきました。また参加した若手研究者からは、「意外な企

業から興味を持ってもらうこともあった。視野が広がった」「企業の方と自分の研究内容や最近の業界の動向をお話しできる貴重な機会でした」といった嬉しい声が聞かれました。

終わりに、人材育成本部では以上の活動に加えて、企業事業所視察、Advanced COSA、J-window、キャリアパス多様化支援セミナー、キャリアマネジメントセミナー、また企業での長期インターンシップ等を通して、これまで以上に若手研究者の実践力を高めることへ注力して参りますとともに、コンソーシアム結成により、東北大学や名古屋大学が運営しているより多くの洗練されたプログラムを博士たちに提供できるようになりましたので、今後ともご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

なお、興味のある方は人材育成本部のホームページをぜひご覧ください。

◆<http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp>

（人材育成本部）



望月人材育成本部長の開会挨拶



樋口人材育成本部特任教授の趣旨説明



企業からの業界動向説明



説明に聞き入る若手研究者



若手研究者のポスター発表



企業との個別情報交換

■ 部局ニュース

工学系部局がインド工科大学ハイデラバード校と部局間交流協定を締結



調印式後の記念写真

工学院・工学研究院・工学部、情報科学研究科及び総合化学院は合同で、12月2日（金）にインド工科大学（IIT）ハイデラバード校との部局間交流協定を締結しました。

フロンティア応用科学研究棟セミナー室で行われた調印式には、IITハイデラバード校から、U. B. Desai学長ほか1名が出席され、本学からは、名和豊春工学研究院長、宮永喜一情報科学研

究科長及び大熊毅総合化学院長ほか6名が出席しました。また、本協定締結の橋渡し役として協力いただいたJICAインド工科大学ハイデラバード校日印産学研究ネットワーク構築支援（FRIENDSHIP）プロジェクトから、松尾美樹コーディネーターが出席しました。

IITハイデラバード校は、日印間の人的・学術交流の強化等のため、IIT



協定書への署名（左から大熊総合化学院長、宮永情報科学研究科長、名和工学研究院長、Desai学長）

傘下大学の一つとして、2008年に日本政府により設立された大学であり、工学・科学技術分野ではインドでも有数の大学です。

本協定の締結により、工学分野における交流が、より一層活発になることが期待されます。

（工学院・工学研究院・工学部、情報科学研究科、総合化学院）

歯学研究科が全北大学校歯医学専門大学院との姉妹校提携25周年記念交流行事を開催



記念式典での集合写真

歯学研究科と大韓民国全北大学校歯医学専門大学院との姉妹校提携は、平成2年に開始され、以来25年間という長期にわたる親密な国際交流が行われてきました。平成27年10月には、全北大学校歯医学専門大学院から15名の教員等が本学を訪問され、記念交流行事を開催しました。

この度は、10月9日（日）から4日間、本学から16名の教員等が全北大学校歯医学専門大学院を訪問し、同校において記念交流行事が開催されました。

記念交流行事として、10月10日（月・祝）に両校の教育状況に係る意見交換をした後、研究者等による研究講演会が開催され、最新の研究成果についての発表及び質疑応答が活発に行われました。その後、姉妹校提携25周年記念式典が催されました。翌日には、施設見学により韓国の文化・歴史を紹介いただき、両校にとって有意義な交流となりました。

このような記念交流行事を通して、両校の親密な関係を保ちつつ、国際共



全北大学校歯医学専門大学院前にて記念撮影



記念式典での両大学歯学研究科長

同研究や国際的な教育を一層発展させられるものと期待しています。

（歯学研究科・歯学部）

歯学研究科で香港大学歯学部学生団体との交流行事を開催



クラーク像前での記念撮影

歯学研究科において、10月17日（月）に32名の香港大学歯学部学生を受け入れ、本学教員や学生との交流行事を開催しました。

これは、香港大学歯学部長から、同

大学歯学部1年生及び2年生の学生団体を「Study Tour」と称して、本学歯学研究科に訪問させたいとの依頼があり、実現したものです。

交流行事については、井上 哲歯学

研究科国際交流支援室長と有馬太郎歯学研究科国際歯科部門講師が担当され、はじめに横山敦郎歯学研究科長の挨拶、本学の紹介の後、小グループに分かれて北海道大学病院歯科診療センター、歯学部学生実習や講義風景の見学、本学の留学生事情の説明などを行いました。夕方には、本学学生や教員との会食の場を設け、活発な交流が行われました。

同大学からは、次年度においても訪問したいとの依頼を受けており、今後更なる交流を深め、両校の学術交流や学生交流が推進されることが期待されます。

（歯学研究科・歯学部）

スラブ・ユーラシア研究センターが冬期国際シンポジウム「体制転換から四半世紀：ポスト共産主義社会の多様化を再考する」を開催

スラブ・ユーラシア研究センターは、12月8日（木）・9日（金）の2日間、恒例となっている半期に一度の国際シンポジウムを開催しました。今回は、ソ連及びユーゴスラビアが解体して体制転換が一段落した1991年から25年という一つの区切りの年にあたることから、社会主義体制が解体した後の25年間に進展したスラブ・ユーラシア諸国における「多様化」に注目し、その様相を比較することを試みました。

シンポジウムでは6つのセッションが設けられ、1日目には「体制転換の有無とドイツの境界」「社会・政治変化の転換点とスラブ・ユーラシアにおける言語変化」「旧ソ連諸国における国家セクター改革の比較：ロシア、中国、インド」の3つのセッション、2日目には「ポスト共産主義社会における家族と国家」「ユーラシアにおける腐敗と反腐敗」「ネオリベリズムとその敵：ポスト共産主義国をめぐる戦

い」の3つのセッションが開催され、17名が報告を行いました。報告者の国別では、日本が8本（うち1本は共同報告）、ポーランド、アメリカ2本（アメリカの1本は共同報告）、デンマーク、ロシア、リトアニア、イギリス、カザフスタン、スロバキアが各1本でした。今回は政治・経済・言語・境界研究と多彩な分野でのセッションを開催し、また、スラブ・ユーラシア地域と他の地域との比較も含めたセッションも実施しましたが、専門領域及び地域の枠を超えて、76名（延べ130

名）の方がセッションに参加しました。

今回のシンポジウムは、センターの第3期中期目標・中期計画期間における共同研究の柱の一つである「地域間比較」を実践するものとして開催しました。今後もスラブ・ユーラシアの地域内の比較、及びスラブ・ユーラシアと他の地域の比較を通して、新たな研究領域の開拓や学際的な共同研究を推進していく予定です。

（スラブ・ユーラシア研究センター）



男性の参加も多かった家族政策のセッション



レセプションの様子

国際広報メディア・観光学院で国際シンポジウム 「地方創生と国際化ー北海道の未来への挑戦」を開催

国際広報メディア・観光学院では、10月28日（金）に札幌グランドホテルにおいて、北海道に関わる主要関連メンバーで、国際化の観点で地方創生を議論するシンポジウムを開催しました。シンポジウムには、経済人や行政関係者、大学関係者を中心に150名の定員を上回る応募がありました。

当日は、後援の内閣府地方創生推進事務局、北海道庁、札幌市のそれぞれの来賓のご挨拶に続き、米沢則寿帯広市長より、食と農業を通じた価値創造プロジェクトである「フードバレーとかち」の現状と今後について基調講演をいただきました。十勝の名産品であるナガイモは、選果場で食品衛生管理の国際基準（HACCP）を取得して、台湾やアメリカなどへの輸出を大きく伸ばしているとの紹介がありました。パネルディスカッションでは、在日オーストラリア大使館のブレット・ターパー公使が、オーストラリアでの

観光産業の発展戦略、北海道との類似性、ニセコ町における外国人観光の増加の必然性について報告しました。また、片山健也ニセコ町長からは、国際リゾート化するニセコでは、海外から移住する人も増えていて、インターナショナルスクールの開校などグローバル人材の育成にも力を入れ始めているとの報告がありました。このほか、日本航空株式会社副社長の藤田直志氏、ステート・ストリート信託銀行会長の高橋秀行氏、電通執行役員の上條典夫氏、北海道新聞社の志子田徹氏、観光学高等研究センターの小林英俊客員教授が参加しました。英語教育などの人材育成の重要性、海外人材の活用、外国企業誘致の環境整備などの国際化による成長戦略について、それぞれの実体験に基づく議論を交わし、北海道の国際化による発展のポテンシャルの大きさと具体策の推進の必要性を改めて認識しました。会場は、白熱した議論

による時間延長にも関わらず、最後まで盛況でした。

（国際広報メディア・観光学院、メディア・コミュニケーション研究院）



米沢帯広市長による基調講演



パネルディスカッションの様子

平成28年度 薬学部成績優秀賞授与式を挙行

薬学部では、12月15日（木）に本学部会議室において、平成28年度北海道大学薬学部成績優秀賞授与式を行いました。

この賞は「GPA制度の導入に伴い、学業が優秀な学生を表彰し、学生の向学心を喚起する」ことを目的として、平成17年度以降に入学した学部3年次生を対象として設けられたもので、今回で10回目の授与式となります。

今年度は、学部専門科目の成績が特に優秀な3名が受賞者に選ばれました。

授与式では、薬学部教員が見守るなか、南 雅文薬学部長から表彰状と記念品が一人ひとりに授与されました。

今後もこの賞が、本学部学生の向学心をより一層喚起するものとなることを期待しています。

（薬学研究院・薬学部）



成績優秀者と南薬学部長（左から2番目）



表彰状を授与される成績優秀者



観光学高等研究センター公開講座「明日の観光を考える」が終了

観光学高等研究センターでは、平成28年度公開講座「明日の観光を考える」を、11月10日から12月22日までの毎週木曜日、全7回にわたり実施しました。例年、リピーターの受講者も多い人気の公開講座で、今年も約40名が熱心に受講しました。

今回は、6名の講師が一つのテーマを担当し、受講者には各回で「宿題」が課せられるという初めての試みをしました。講師陣は「ロングトレイル」

「エコツーリズム」「樹木葬」「まなざし」「インバウンド」「世界遺産」といったテーマを用意し、受講者はテーマに関連した問題提起を受けて、自身の意見やアイデアを講師陣に提出し、講座の中で双方の意見を議論することができました。

聴講するだけではないインタラクティブな講座形式にしたことで、受講者と講師陣が対話することができ、受講者の皆様には各回のテーマについ

て、より深く考えていただけたと思います。講師陣も宿題の回答から、受講者のテーマに対する関心の高さや、こうした相互コミュニケーションの必要性を感じる好機となりました。来年度もより良い公開講座を開講することを目指し、企画していきたいと思ひます。

(観光学高等研究センター)



授業風景



修了証書の授与

工学系部局でアクティブラーニングに関するFDを開催

工学研究院では、情報科学研究科の協力を得て、毎年工学院教育・キャリア企画室で主催するFDを学内外から講師を招いて開催しています。

本年度は、11月30日（水）にフロンティア応用科学研究棟鈴木章ホール（レクチャーホール）において、高等教育推進機構高等教育研修センターの山本堅一特任准教授を講師に、最近話題になることが多いアクティブラーニングに関するFDを開催しました。

アクティブラーニングとは、学修者が能動的に学習に取り組む学習法の総称で、一般的には座学中心の教授法ではなく、課題解決型学習、グループディスカッション、ディベート及びグループワーク等を有効に取り入れて実施されるものです。本FDでは、アクティブラーニングを正しく理解するために、教員に求められていることについて山本特任准教授から詳しく解説がありました。

本FDには、97名の教職員の参加がありました。授業等で参加できなかった教職員向けに、工学系教育研究センター（CEED）の協力を得て、本FDのeラーニングコンテンツ化を予定しています。工学系部局では、授業や研究の合間にいつでもFDに参加できる環境の構築を目指しています。

(工学院・工学研究院・工学部、情報科学研究科)



講演する山本特任准教授



講演の様子

工学系部局で安全衛生管理講演会を開催

工学研究院、情報科学研究科、量子集積エレクトロニクス研究センターでは、「工学部安全の日※」関連行事として、毎年学外から講師を招いて、安全衛生管理に係るテーマで講演会を開催しています。

本年度は、12月7日（水）に工学部オープンホールにおいて、工学院教育・キャリア企画室が開催するFDとの合同企画として開催しました。

札幌医科大学医学部救急医学講座の成松英智教授を講師に迎え、「学内での救急医療に関する理解向上」と題して、急病や怪我等により、教室や実験室内で救急医療が必要になった際に身につけておくべき知識や大規模災害時における怪我人への応急手当て等につ

いて紹介があり、引き続き、最近の救急医療に関する話題について講演がありました。

本講演会には、125名の教職員及び学生が参加し、参加者からは満足度が高かった旨の感想が多く聞かれ、充実した講演会となりました。



講演する成松教授

※工学部安全の日

平成4年8月10日に工学部で発生した重大事故に鑑み、本学部における安全管理・安全教育体制の整備と安全意識の向上に資するために、制定された日。

(工学院・工学研究院・工学部、情報科学研究科、量子集積エレクトロニクス研究センター)



講演会の様子

文学研究科で研究室運営に関するFD研修を開催

文学研究科では今年度の第3回FD研修として、12月2日（金）に豊橋技術科学大学の中内茂樹教授を講師としてお迎えし、研究室の運営方法に関して講演いただき、文学研究科の教職員46名が参加しました。

文学研究科は学院・研究院化を控え、他分野との融合の機会が増えることが期待されます。しかし、工学系の教員や企業との共同研究の機会が少ない文学研究科の教員にとっては、研究室全体でチームとして複数のプロジェクトを進めていくような研究室の運営形態になじみがありません。そのため、異なる文化の研究室の運営方法を知ることで新たな洞察を得るべく、今回のFDを企画しました。中内教授の研究室は人気があり、留学生を含む学部生・大学院生・博士研究員を合わせて20人以上の大所帯とのことでした。

講演では、研究室の運営方針の明示、定期的な対面ミーティングの実施、ドキュメンテーションの徹底、情報共有の重要性について、事例に基づいて解説していただきました。このほかリーディング大学院プログラムに関する事例もご紹介いただきました。

工学系の研究室の運営形態をそのまま文学研究科の全ての研究室に当てはめることを目的とした研修ではありませんでしたが、学部・大学院教育を通

して学生を育てるだけでなく、教員自らも最先端の研究を進めるという姿勢は文学研究科の教員にも重なる点で共通点です。本研修はこうした共通点に普段とは異なる角度から照明を当て、文学研究科の教員の現在の取り組み方を見つめ直す機会となったという声も聞かれ、大変有意義な研修となりました。

(文学研究科・文学部)



豊橋技術科学大学 中内教授



FD研修会の様子

環境科学院・地球環境科学研究院でFD研修会 「国際的な教育プログラム構築に向けて」を開催

環境科学院・地球環境科学研究院では、12月13日（火）にFD研修会「国際的な教育プログラム構築に向けて」を開催しました。

本FD研修会は、現在、本学院環境起学専攻においてカリキュラム再編を進めている一環として、国際的な教育の質の保証に取り組まれている、大阪大学大学院文学研究科の竹中 亨教授を講師としてお招きし、教育の質保証について、本学教職員の理解を深める

ことを目的に開催したものです。

今回は、学内に広く参加を呼びかけ、本研究院の教員及び本学院の学生のほか、医学研究科、教育学研究院、北極域研究センター及び国際連携機構の教員、教育学院の学生の計19名が参加しました。

最初に、環境起学専攻長の山中康裕教授から講演内容の概要について説明があり、続いて、竹中教授から、「大学教育における学習成果＝コンピテン

ス法－チューニングの導入に向けて」と題して、ヨーロッパの大学の事例紹介や、国際的に通用する教育の質保証の基本的な考え方について講演いただきました。講演終了後には、多くの参加者から質問が寄せられ、活発な質疑応答が行われました。

（環境科学院・地球環境科学研究院）



説明を行う山中環境起学専攻長



講演を行う竹中大阪大学教授

環境科学院・地球環境科学研究院で「ハラスメント予防FD研修会」を開催

1月5日（木）に環境科学院・地球環境科学研究院で「ハラスメント予防FD研修会」を開催しました。本FD研修会は、本年度から本学にハラスメント相談室が設置され、対応組織、相談対応機能及び問題解決機能が大きく変更になったことへの理解を深めるとともに、ハラスメントの予防に資する啓発活動の一環として開催したものです。札幌キャンパス以外の会場にはポリコムを接続し、本研究院・学院の教職員

42名が参加しました。

最初に、本研究院ハラスメント予防推進員の谷本陽一教授から冒頭の挨拶があり、ハラスメント相談室長・学生相談室長・特別修学支援室長である文学研究科の櫻井義秀教授を講師に、「北海道大学におけるハラスメント対応の現状と課題」と題した講演がありました。講演では、本学におけるハラスメント相談システムや近年の傾向と分析、多様性への配慮など気を付ける

べきことや誤解等が生じた際の対処等について詳しい説明があった後、活発な質疑応答が交わされ、充実した研修会となりました。

本研究院・本学院では、今後もハラスメント予防のため、様々な啓発活動に取り組んでいく予定です。

（環境科学院・地球環境科学研究院）



冒頭の挨拶を行う谷本教授



講演を行う櫻井ハラスメント相談室長

農学研究院で平成28年度第2回FD研修会を開催

農学研究院では、澤村正也安全衛生本部副本部長（理学研究院教授）を招いて、安全衛生に関するFD研修「化学物質を取り扱う研究室の安全対策」を11月24日（木）に農学部N21講義室にて開催し、教員16名、事務職員4名が参加しました。

講演では、「東日本大地震と熊本地震における東北大学と熊本大学の被災状況と地震対策」「化学物質を扱う研究室の安全衛生自主管理（研究室のリスクアセスメントと対策）」「化学物質が関わる法令対応」が取り上げられました。農学研究院では、今年度も未固定の実験棚などの耐震補強を実施しましたが、札幌市の地震被害予測では、月寒断層や西札幌断層による地震により本学が位置する市中心部にも大きな被害が想定されています。東日本

大地震による実験室の被害状況の説明のあと、薬品類の管理方法や各種実験器具並びに高圧ポンペの固定など、澤村教授の研究室で実際に行われている地震対策が紹介されました。未知への挑戦ともいえる研究には様々な危険が潜んでいるので、教員はそこで学ぶ学生を守る責務があり、安全管理が研究室運営の最優先事項となること、特に、化学物質を取り扱う研究室においては、保存量や頻度に関わらず、正しい知識と高い安全意識をもって研究に臨まなければならないことなどが強調されました。また、研究室独自の安全・防災マニュアルが紹介され、電気火災、寒剤事故を未然に防ぐ具体的な対処方法、毒物・劇物の管理、学生への安全教育の重要性が述べられました。最後に、安全マニュアルの総論の

文言「安全は授かるものではなく、作り上げるものである」「研究室の構成員一人一人が高い意識をもって努力し、かつ互いに密接で厳格な連携があってこそ成り立つものである」「完全な安全はない。常により高いレベルを目指して進化しなければならない。これは研究者の心得である」が紹介され、研修会は終了しました。

地震や事故が起きてからでは取り返しがつきません。今回の研修会で改めて、安全衛生自主管理の重要性並びに安全管理に関する高い意識を持つことの重要性を強く感じました。講演者の澤村教授には、ここに改めて感謝申し上げます。

（農学院・農学研究院・農学部）



研修の様子

生命科学院がアクティブラーニング形式の「Research Ethics Workshop for IGP students」を開催

12月13日（火）に国際教育研究センター内アクティブラーニング教室にて「Research Ethics Workshop for IGP students（研究倫理ワークショップ）」を開催しました。このワークショップは、国際部国際教務課とオープンエデュケーションセンターの協力のもと、国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムとして生命科学院が実施する「次世代の生命科学グローバルリーダー養成プログラム International Graduate Program, Training Program for Global Leaders in Life Science (IGP-GLLS)」が、プログラム学生を対象として実施しました。講師には文学研究科応用倫理研究

教育センターの眞嶋俊造准教授を迎えました。

受講登録をした学生は、事前に大学院準備教育プログラム用に準備されたe-learning systemの眞嶋准教授による「研究倫理」講義を動画視聴し、事前学習により得た知識を活用しながら、与えられた研究倫理に関する課題に取り組むという反転学習形式でのアクティブラーニングを行いました。講義は全編英語で実施され、日本人学生3名、中国・フィリピン・マレーシア・オーストリア・ナイジェリアからの外国人留学生10名が3つのグループに分かれることで、ディスカッションが活発に行われました。日本人学生と外国

人留学生が共学することで、知識や考え方を共有するだけでなく、意見を述べる姿勢についても、それぞれの学生が良い刺激を受けたことと思います。

ワークショップ終了後には、国際教育研究センター内学生生活動室にて懇親会を行い、研究生活や日本の印象等を語り合いながら、プログラム学生同士が親睦を深めました。

開催にあたりご理解・ご協力いただいた指導教員の皆様、ご支援いただいた事務担当スタッフの皆様には深くお礼申し上げます。

（生命科学院・先端生命科学研究院）



参加学生集合写真



グループディスカッションの様子



ディスカッション内容を発表する様子

低温科学研究所技術部で第22回技術報告会を開催

12月2日（金）、低温科学研究所講義室において低温科学研究所技術部、技術支援本部共催による第22回技術報告会を開催しました。

報告会では、14件（うち2件は要旨のみ）の低温科学研究所技術部が関わった研究発表や技術報告が行われました。

例年同様、専門領域を超えて、多様な分野の研究に触れる貴重な場となり、延べ30名を超える研究所内外の研究者・学生・技術職員が参加し、活発な意見が交わされました。また、低温科学研究所共同利用研究に採択されて

いる学外の技術職員による発表も行われました。

本報告会の内容をまとめた「北海道大学低温科学研究所技術部技術報告第22号」を発行しました。報告集は本研

究所技術部ウェブサイトをご覧ください。

◆<http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/tech/>

（低温科学研究所）



渡部直樹技術部長の挨拶



技術報告会の様子

総合博物館で「はじめての人工雪－誕生80年記念企画 中谷宇吉郎展」を開催

総合博物館3階S301室にて、11月8日(火)から3月5日(日)まで、「はじめての人工雪－誕生80年記念企画 中谷宇吉郎展」を開催しています。

「雪は天から送られた手紙である」の言葉で知られる中谷宇吉郎教授が、昭和11年3月12日に、本学の常時低温研究室において、世界で初めて人工雪を製作してから80年となります。本展示では、世界初と認定された人工雪結晶の顕微鏡写真や、様々な気象条件を作り上げ雪の結晶を成長させる人工雪成長装置(複製)をはじめ、本学に低温科学研究所が設立されるに至った数々の業績の他、雪の科学者であり随

筆家・芸術家としても多才であった中谷教授について紹介しています。

なお、総合博物館1階「北大のいま－挑戦する北大」の北極域研究センター展示では、現在の航空機の安全運

行に活かされている中谷教授の着氷や霧の研究を紹介するパネルや貴重な資料を常設展示しています。

(総合博物館)



展示室の様子



人工雪の顕微鏡写真

環境健康科学研究教育センターが第2回世界保健機関西太平洋地域協力センターフォーラムに参加



参加者集合写真



意見交換の様子

11月28日(月)・29日(火)に、フィリピン・マニラ市にある世界保健機関西太平洋地域事務局(WHO WPRO: Western Pacific Regional Office)にて、第2回西太平洋地域WHO Collaborating Centre(WHOCC: WHO研究協力センター)フォーラムが開催されました。昨年、ニューヨークの国連本部にて採択された持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Developmental Goals)のための2030アジェンダの達成に向けた、WHOCCによる貢献と、WHOと

WHOCC、WHOCC間の協力強化を目的に、140以上のWHOCCから約250人が参加しました。環境健康科学研究教育センターはWHOCC for Environmental Health and Prevention of Chemical Hazards(化学物質曝露によるハザードや健康障害予防に関する研究協力センター)に指定されており、本フォーラムには岸 玲子特別招へい教授(WHOCC Head)と荒木敦子准教授の2名が参加しました。

フォーラムでは、SDGsに向けたWHO

地域オフィスとWHOCCによる具体的な成功事例の紹介、WHOCCの活動紹介、加盟国における研究推進等に関する情報共有が行われました。本学の活動を発信し、今後の活動に向けた連携関係を築き、有益な情報を得ることができた2日間でした。なお、本会議には人獣共通感染症リサーチセンター(WHO Collaborating Centre for Zoonoses Control)も参加しました。

(環境健康科学研究教育センター)

「脳科学研究教育センター合宿研修」の開催



参加者の集合写真

12月10日（土）・11日（日）に、北広島クラッセホテルで脳科学研究教育センターの合宿研修を行いました。平成25年度から、多くの関係者が参加しやすいように札幌近郊で開催しています。

研修には、渡邊雅彦センター長をはじめ、文学、医学、理学、薬学、生命科学、教育学、保健科学の各研究科・研究院・学部属する教員16名、大学院生13名、学部生3名、事務職員2名の計34名が参加しました。2日間の研修では、口頭による大学院生・学部生の研究発表（研修Ⅰ～Ⅲ）、基幹教員等の講演（研修Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ）、センター長講話（研修Ⅴ）を行いました。大学

院生の発表では、ようやく研究が本格化し始めたばかりの修士課程1年生だけでなく、昨年も合宿に参加した修士課程2年生や博士課程の履修生の研究成果を聞くことができ、研究の進捗を知ることができました。発表会では大変活発な質疑応答があり、各発表とも予定時間を超えて議論が続きました。また、渡邊センター長からは、「脳は若いうちに：シナプスの刈込みと可塑性」と題して、脳の発達に関する最先端の知見を織り交ぜた講話がありました。これらの研修を通して脳科学研究への理解を深めると同時に、深夜に及ぶ懇親会も含め、部局を超えた学生と教員の間の実質的な交流を行いました。



研修会の様子



懇親会の様子

この合宿研修は、とかく所属研究室の研究テーマや研究手法に偏りがちな大学院教育を、その垣根を越えて融合させることを目指す本センターの最も重要な活動の一つです。平成25年度から試行している本専攻の修士生と学部生の参加や札幌近郊のリゾートホテルでの開催も大変好評で、来年度もより多くの関係者の参加を期待しています。

（脳科学研究教育センター）

北海道大学病院で 「第55回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ」を実施

北海道大学病院では12月21日（水）、病院アメニティホールにおいて、「第55回ふれあいコンサート クリスマスの夕べ」を開催しました。毎年、患者サービス推進委員会が中心となって色々な企画をしており、今年も会場のアメニティホールには、電飾が施された高さ3mの特大クリスマスツリーや空気で膨らませたエアサンタが飾られ、見慣れた風景が華やかに彩られました。

寶金清博病院長の開会の挨拶で開幕し、続いて、森の時間ミュージックベル、札幌ジュニアジャズスクール

（SJF）の2団体による演奏が行われました。定番のクリスマスナンバーの演奏や、会場全体で「ふるさと」や「ジングルベル」を合唱するなど、アメニティホールはクリスマスの雰囲気になりあふれました。

演奏の合間には北海道日本ハムファイターズ選手のサイン入り色紙やボールを景品としたお楽しみ抽選会が、演奏終了後には子どもたちへのプレゼント配付が行われ、多くの子どもたちの笑顔が見られました。

コンサートは佐藤ひとみ看護部長の挨拶で幕を閉じました。職員らによる

手作りのクリスマスコンサートは、訪れた人々の心に温かな思い出を残したことでしよう。

（北海道大学病院）



開会の挨拶をする寶金病院長



森の時間ミュージックベルの演奏



札幌ジュニアジャズスクールの演奏



佐藤看護部長による閉会の挨拶

附属図書館で「救命導入（AED）講習会」を開催

附属図書館では、12月5日（月）・6日（火）の2日間、札幌市北消防署札幌北出張所の消防署員3名を講師に迎え、本館4階大会議室において図書館職員を対象にした救命導入（AED）講習会を開催しました。

両日共に34名、計68名の参加があり、講師よりAED（自動体外式除細動器）の使用方の説明の後、人体モデルを使って倒れている人への心臓マッサージやAED使用の実践訓練を行いました。

附属図書館は本館2階総合カウン

ター前と北図書館2階カウンター前にAEDを設置し、札幌市が実施している「さっぽろ救急サポーター事業」にも参画しています。

（附属図書館）



講師の消防署員による説明



実践訓練の様子

タイ・バンコクにおいて「第3回国際食資源学フォーラム ーアジアの食資源問題と大学の果たすべき役割ー」を開催



集合写真

12月13日（火）・14日（水）に「第3回国際食資源学フォーラムーアジアの食資源問題と大学の果たすべき役割ー（3rd International Forum on Global Food Resources -Universities' Role in Contributing to Asian Nations for the Issues of Global Food Resources-）」を、国際食資源学院設置準備委員会と国際連携研究教育局（GI-CoRE）食水土資源グローバルステーションの主催、本学の国際交流協定校であるカセサート大学水産学部との共催により、タイ・バンコク市内のカセサート大学バンケンキャンパスに近いMaruay Garden Hotelで開催しました。

本フォーラムは、平成29年4月設置の国際食資源学院における修士課程の内容を紹介しながら、アジアの食資源に関する諸問題を、タイをはじめとす

るアジア各国から話題提供していただき、課題解決のために本学を含め各国の大学が果たすべき役割について議論することを目的として開催したものです。

フォーラムでは丸谷知己食水土資源グローバルステーション長、及びタイ・アジア工科大学の山本和夫副学長が基調講演を行いました。また、タイ・カセサート大学とチュラロンコン大学並びにプリンス・オブ・ソクラー大学、ラオス国立大学、カンボジア王立農業大学、シンガポール国立大学、インドネシア・ボゴール農業大学、行政機関としてタイ・農業協同組合省の水産局と農業局、東南アジア漁業開発センター（SEAFDEC）、さらに民間企業からチェンマイ大学と共同プロジェクトを進めるウシオ電機株式



フォーラムの様子



General Discussionの様子

会社、本学との共同プロジェクトを進めている日立化成株式会社から参加があり、活発な意見交換が行われました。

2日目の最後に行われたGeneral Discussionでは、世界の食資源に関する諸課題の解決に向け、各大学や諸機関が連携して教育と研究に取り組むことの重要性が改めて指摘され、今後の連携強化に向けて相互の協力を推進していくことを確認して、盛会裡に終了しました。

（国際食資源学院 H29.4 設置）

博士學位記授与

12月26日（月）に本学大学院研究科等の所定の課程を修了した課程博士は24人、及び本学に学位論文を提出してその審査、試験等に合格した論文博士は2人でした。なお、被授与者の氏名と論文題目等は次のとおりです。

(学務部学務企画課)

課程博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者		博士論文名
	氏名		
博士（医学）	てら 寺 むら 村 こう 紘 いち 一		腭頭部癌における門脈浸潤の診断と予後予測に関する研究 主査：准教授 神山 俊哉
博士（歯学）	いな 稲 がき 垣 ゆり な 友理奈		色素を用いた唾液量の簡便スクリーニングシートの開発 主査：教授 山崎 裕
博士（情報科学）	こん 今 の 野 ひで 英 あき 明		Analysis on Acoustical and Perceptual Characteristics of Whispered Speech and Whisper-to-Normal Speech Conversion (ささやき声の音響的・知覚的特徴の分析と通常音声への変換) 主査：教授 工藤 峰一
博士（工学）	ひ 樋 うら 浦 さと 諭 し 志		Study on Atomic and Local Electronic Structures of Fe ₃ O ₄ (001) Film Surfaces: Clean and Modified by Adsorbed H Atom (清浄および水素吸着マグネタイト薄膜表面の原子構造と局所電子状態に関する研究) 主査：教授 高橋 庸夫
	フー 胡 ビン 兵		Temperature dependence of spin-dependent tunneling conductance of magnetic tunnel junctions with half-metallic Co ₂ MnSi electrodes (ハーフメタルCo ₂ MnSi電極を用いた強磁性トンネル接合のスピン依存コンダクタンスの温度依存性) 主査：教授 植村 哲也
	はぎ 萩 わら 原 じゅんいちろう 淳一郎		Wireless OFDM Channel Estimation using a Stochastic Approach (確率・統計的なアプローチを用いた無線OFDMチャネル推定) 主査：教授 大鐘 武雄
博士（情報科学）	ソン 孫 ジュン 準 ホ 浩		Energy Management for Demand Response in a Commercial Building with Chiller System and Energy Storage System (冷却システムとエネルギー貯蔵システムを持つ商業用ビルにおけるデマンドレスポンスのためのエネルギーマネジメント) 主査：教授 北 裕幸
博士（環境科学）	さか 酒 い 井 ゆう 佑 ま 棋		Pathogen transmission models in clonal plant population – Analysis on the effects of superinfection and seed reproduction – (クローナル植物個体群における病原体伝染モデル–重複感染と種子繁殖が与える影響の解析–) 主査：教授 高田 壯則
	ジュリアス ADAM ベラスコ LOPEZ		New secondary metabolites from marine cyanobacteria of the genus <i>Moorea</i> collected in Malaysia and Saudi Arabia (マレーシアおよびサウジアラビア由来海洋ラン藻 <i>Moorea</i> 属から得られた新規2次代謝産物) 主査：教授 沖野 龍文
	なか 中 た 田 かず 和 き 輝		Studies on formation and variability of Antarctic coastal polynyas taking account of ice type (海水タイプに着目した南極沿岸ポリニヤの形成・変動機構に関する研究) 主査：教授 大島 慶一郎
	くり 栗 ばやし 林 たか 貴 のり 範		海洋環境モニタリングとコンブ標本の窒素安定同位体比より推定する北海道日本海における栄養塩供給特性の歴史的評価 主査：特任教授 門谷 茂
	その 園 き 木 し 詩 おり 織		音響手法を用いたアマモ場の分布および生態系サービスの定量化に関する研究 主査：教授 宮下 和士

博士 (理学)	ちのゆうき 千野由喜	Mathematical Approach to the Statistical-Mechanical Models in Random Media (ランダム媒質中の統計力学模型に対する数学的アプローチ) 主査: 准教授 坂井 哲
	にいろみみ 新納美美	ケアの科学と価値 — 応用科学哲学による看護学の再編と価値中立化を図る思考法の検討 主査: 教授 松王 政浩
博士 (農学)	よしなりあきら 吉成晃	Endocytosis and Intracellular Trafficking of a Borate Transporter BOR1 in <i>Arabidopsis thaliana</i> (シロイヌナズナのホウ酸輸送体BOR1 のエンドサイトーシスと細胞内輸送に関する研究) 主査: 准教授 尾之内 均
	ハイキ マート Haiki Mart ユピ Yupi	Study on stream water discharge and organic carbon concentrations, loads and yields of tropical peat swamp forest of Riau, Sumatra, Indonesia (インドネシア国スマトラ島リアウ州の熱帯泥炭湿地林における河川流出と有機態炭素流出に関する研究) 主査: 教授 井上 京
	ワン 王	十勝の大規模畑作地域におけるバイオエネルギー生産の可能性と環境影響について 主査: 教授 柴田 洋一
博士 (生命科学)	サディア ナズ ニン Sadia Nazneen カロビ Karobi	Time Dependent Deformation of Tough Polyampholyte Hydrogels (強靱なポリアンフォライトハイドロゲルの時間依存変形) 主査: 教授 龔 劍萍
博士 (教育学)	ほんまじゅんこ 本間淳子	外国人の学習と生活をつなぐネットワーク活動の意義-母親たちの協同的な活動「料理交流会」の事例分析から- 主査: 教授 宮崎 隆志
博士 (工学)	ポルタ マテ オ Porta Matteo	Controlled Synthesis of Nanoparticles and Composites via Sputtering in Liquid (液中へのスパッタリングによるナノ粒子とそのコンポジットの制御された合成) 主査: 教授 米澤 徹
博士 (理学)	ふじたにまなぶ 藤谷 学	Synthetic Studies on Enfumafungin (エンフマファンギンの合成研究) 主査: 教授 鈴木 孝紀
	ユウ子 チン ユウ子 チン	Construction of Hematite-based Photoelectrochemical Cells for Visible Light Water Splitting (ヘマタイト系光電気化学セルの構築および可視光照射下における水分解に関する研究) 主査: 教授 加藤 昌子
	リュウ 劉	Structural and Environmental Modulation on Graphitic Carbon Nitride Materials for Efficient Photocatalytic Hydrogen Evolution (構造及び反応場を制御したカーボンナイトライド光触媒による水素生成に関する研究) 主査: 教授 加藤 昌子
博士 (工学)	クルラム Khurram シャザド Shahzad	Formation Behavior of Nanostructured Anodic Films on Metals in Fluoride Containing Organic Electrolytes (フッ化物含有有機電解液中における金属上へのナノ構造アノード酸化皮膜の生成挙動に関する研究) 主査: 教授 安住 和久

論文博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者	博士論文名
	氏名	
博士 (医学)	つるがけんきち 敦賀健吉	急性炎症痛におけるカリウム-クロール共輸送体KCC2の発現減少に対するTrkB受容体の役割についての研究 主査: 教授 岩永 敏彦
博士 (環境科学)	ロイダ LOIDA オロレス OLORES カサルメ CASALME	Total synthesis of dolastatin 16 (ドラスタチン16の全合成) 主査: 教授 松田 冬彦

■ 諸会議の開催状況

役員会（平成28年12月7日）

協議事項・経済学研究院，医学研究院，歯学研究院，獣医学研究院の設置について

・諸規則の一部改正について

報告事項・総長補佐の任命について

役員会（平成28年12月14日）

議案・全学管理人件費の抑制にかかる暫定方策について

教育研究評議会（平成28年12月14日）

議題なし

役員会（平成28年12月26日）

議案・就業規則関連規程の一部改正について

・クロスアポイントメントの適用について

・平成28年度教育研究支援業務総長表彰について

報告事項・北大統一IDの導入に向けた検討について

・会計検査院による平成27年度決算検査報告について

※規程の制定，改廃については，「学内規程」欄に掲載しています。

■ 学内規程

国立大学法人北海道大学職員災害補償法定外給付規程の一部を改正する規程

（平成28年12月26日海大達第210号）

平成28年4月1日付けで人事院規則16-3（災害を受けた職員の福祉事業）等が改正されたことにより，第13条の規定に基づく障害特別援護金及び遺族特別援護金の支給額を改定することに伴い，所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学職員育児休業・介護休業等規程の一部を改正する規程

（平成29年1月1日海大達第1号）

国立大学法人北海道大学子どもの園保育園職員就業規則の一部を改正する規則

（平成29年1月1日海大達第2号）

国立大学法人北海道大学契約職員就業規則の一部を改正する規則

（平成29年1月1日海大達第3号）

国立大学法人北海道大学短時間勤務職員就業規則の一部を改正する規則

（平成29年1月1日海大達第4号）

国立大学法人北海道大学子どもの園保育園臨時職員就業規則の一部を改正する規則

（平成29年1月1日海大達第5号）

国立大学法人北海道大学特任教員就業規則の一部を改正する規則

（平成29年1月1日海大達第6号）

国立大学法人北海道大学職員労働時間，休憩，休日及び休暇規程の一部を改正する規程

（平成29年1月1日海大達第7号）

国立大学法人北海道大学船員労働時間，休日及び休暇規程の一部を改正する規程

（平成29年1月1日海大達第8号）

育児休業，介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律（平成3年法律第76号）の一部改正等に伴い，所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部を改正する規程

(平成29年1月1日海大達第9号)

入試手当について、外国人留学生を対象として特別に編成する理系学士課程教育プログラムの入学試験に係る入試手当を支給することに伴い、所要の改正を行ったものです。

北海道大学病院規程の一部を改正する規程

(平成29年1月1日海大達第10号)

平成29年1月1日付けで、北海道大学病院に臨床研究監理部を設置することに伴い、所要の改正を行ったものです。

■ 研修

平成28年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修

開催期間：平成28年12月1日・2日

開催場所：遠友学舎談話ラウンジ

研修目的：学生指導、学生支援及び学生サービス業務を円滑かつ適正に行うために必要な基本的知識、対応能力等を習得することにより、学生支援担当職員としての能力の向上を図ることを目的とする。



徳久治彦理事・事務局長の挨拶



出口寿久学務部長から修了証書の授与



研修の様子

(学務部学生支援課)

■表敬訪問

国内

年月日	来訪者
28.12.28	JR北海道ホテルズ株式会社 代表取締役社長 石見 誠嗣 氏



JR北海道ホテルズ株式会社
代表取締役社長 石見 誠嗣 氏 (左側)

(総務企画部広報課)

海外

年月日	来訪者	来訪目的
28.12.2	インド工科大学ハイデラバード校 Uday B. Desai 学長	部局間交流協定の調印及び 両大学の交流に関する懇談
28.12.2	Aleksi Härkönen フィンランド北極担当大使	学内視察及び表敬訪問



インド工科大学ハイデラバード校
Uday B. Desai 学長 (前列中央左)



Aleksi Härkönen
フィンランド北極担当大使 (前列中央左)

(国際部国際連携課)

■人事

平成28年12月15日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【部局長・施設長等】 大学院法学研究科長 法学部長 (期間：平成30年12月14日まで)	加 藤 智 章	大学院法学研究科教授
【副研究科長・副研究院長等】 大学院法学研究科副研究科長 (期間：平成30年12月14日まで)	池 田 清 治	大学院法学研究科教授
【教育研究評議会評議員】 (期間：平成30年12月14日まで)	池 田 清 治	大学院法学研究科教授

平成28年12月31日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【准教授】 (辞職)	若 尾 宏	大学院医学研究科准教授
【助教】 (辞職)	松 尾 雄一郎 山 本 隆 晴 中 谷 直 輝	北海道大学病院助教 遺伝子病制御研究所助教 触媒科学研究所助教
【技術職員等】 (辞職)	佐 賀 綾 奈 齊 藤 千 晴 鈴 木 直 美 花 田 真理子	北海道大学病院薬剤部薬剤師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師
【嘱託職員】 (辞職)	堀 江 秀 男	財務部調達課

平成29年1月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【経営協議会委員】 (期間：平成30年12月31日まで)	Christina Ahmadian	一橋大学大学院商学研究科教授
【副研究科長・副研究院長等】 大学院医学研究科副研究科長 (期間：平成29年3月31日まで)	渥 美 達 也	大学院医学研究科教授
【教授】 大学院水産科学研究院教授	宮 澤 晴 彦	大学院水産科学研究院准教授
【准教授】 大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授 大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授 国際連携研究教育局准教授	周 倩 奈 良 雅 史 MONTEUX CECILE	大学院メディア・コミュニケーション研究院助教 大学院メディア・コミュニケーション研究院助教 採用
【助教】 大学院理学研究院助教 北海道大学病院助教	水 島 秀 成 小 金 丸 聡 子	採用 採用

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
北海道大学病院助教 遺伝子病制御研究所助教 国際連携研究教育局・北極域研究センター助教	中 智 昭 岸 本 拓 磨 SAUNAVAARA JUHA MIKAEL	採用 採用 採用
【URA職】 大学力強化推進本部URA	阿 部 真 育	採用
【主任】 経済学研究科・経済学部主任	佐々木 えり子	北海道大学病院総務課主任
【係員】 財務部経理課 学務部学務企画課 文学研究科・文学部 獣医学研究科・獣医学部 工学系事務部教務課 北海道大学病院総務課 北キャンパス合同事務部	越 田 京 介 清 水 苑 子 辻 夏 希 佐 藤 愛 菜 阿 部 ひかり 沢 井 久 志 工 藤 高 志	採用 採用 採用 採用 採用 採用 採用
【技術職員等】 北海道大学病院看護部看護師	銭 谷 菜 子	採用

新任部局長等紹介

平成28年12月15日付

法学研究科長・法学部長に



かとう ともゆき
加藤 智章 教授

平成28年12月14日限りで長谷川晃法
学研究科長・法学部長が任期満了となり、
その後任として加藤智章教授が発令
されました。

任期は、平成30年12月14日までです。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年2月9日
昭和54年 3 月 小樽商科大学商学部卒業
昭和57年 3 月 北海道大学大学院法学研究科修士課程修了
昭和60年 5 月 北海道大学大学院法学研究科博士課程単位修得退学
昭和60年 6 月 山形大学人文学部講師
昭和63年10月 山形大学人文学部助教授
平成 3 年 6 月 法学博士 (北海道大学)
平成 7 年 4 月 新潟大学法学部教授
平成21年 4 月 北海道大学大学院法学研究科教授
平成26年12月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
平成28年12月 }
平成26年12月 } 北海道大学大学院法学研究科副研究科長
平成28年12月 }

新任教授紹介

平成29年 1 月 1 日付

水産科学研究院教授に



みやざわ はるひこ
宮澤 晴彦 氏

海洋生物資源科学部門
海洋共生学分野

生年月日

昭和30年 4 月15日

最終学歴

北海道大学大学院水産学研究科博士課程修了 (昭和62年 9 月)
水産学博士 (北海道大学)

専門分野

水産経営経済学

訃報

名誉教授 たけやま たろう 竹山 太郎 氏
(享年95歳)



名誉教授 竹山太郎先生が平成28年12月18日に逝去されました。先生は、昭和20年9月北海道帝国大学工学部生産冶金工学科をご卒業後、北海道大学工学部助手、講師、助教授を経て、同38年10月教授に昇任、約40年間にわたり現在の工学研究院附属エネルギー・マテリアル融合領域研究センターの前身である工学部附属金属化学研究施設及びエネルギー先端工学研究センターの発展に尽力され、同60年3月停年退官されました。

先生は、電子顕微鏡が開発された当初から、金属物理学研究への応用を積極的に推進し、アルミニウム合金の時

効硬化の研究をはじめ、鋼の時効析出、高温変形、鋼中の水素挙動などに関する多数の画期的研究を行い、それらの基礎並びに応用研究の発展に貢献されました。特に、金属化学研究施設への加速電圧650kV及び1300kVの超高圧電子顕微鏡の設置により、金属物理学研究の発展に貢献され、さらには、イオン加速器と電子顕微鏡による電子線・イオン同時照射装置の開発により、本学現有のマルチ量子ビーム超高圧電子顕微鏡の開発に繋がる基礎を築かれました。それらの研究成果により、昭和46年に日本電子顕微鏡学会瀬藤賞、同58年には日本金属学会谷川・ハリス賞を授与されました。また、学部、大学院の講義や研究指導を通じて教育にも尽力され、多くの研究者育成に貢献されました。

学内では、金属化学研究施設長を延べ8期16年間、さらに、学内共同利用施設超高圧電子顕微鏡研究室運営委員長を務められました。その成果として、平成6年6月に金属化学研究施設はエネルギー先端工学研究センターへ

と発展し、その後の工学研究院附属エネルギー・マテリアル融合領域研究センターへと発展する基礎を築かれました。学外にあっては、日本電子顕微鏡学会会長をはじめ、日本金属学会理事、評議員、分科会副委員長及び北海道支部長等の関連学会の各種役員を歴任し、その運営に多大な貢献をされました。

本学を停年退官された後は、昭和61年11月から平成3年11月まで数度にわたり、中国北京有色研究総院技術顧問及び国際協力事業団の技術協力専門家を務められ、中国の科学技術の振興を通して、日本と中国の国際協力の推進役を果たされました。平成8年11月には、これらの顕著な教育研究功勞により、勲三等旭日中綬章を受章されました。

先生の長年にわたるご貢献に改めて感謝し、ここに謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(工学院・工学研究院・工学部)

編集メモ

- 本年も早1ヶ月が過ぎました。冬の寒さもいよいよ本格的になってきています。
- 受験シーズンを迎え、1月14日(土)・15日(日)には、大学入試センター試験が本学でも実施されました。荒れた天気になるとの予報でしたが、当日は心配されていた雪もそれほど降らず、大きな混乱もなく、試験は無事終了しました。





2012.12.8 函館本線 大沼公園～赤井川（七飯町）

北の鉄道風景 46 流れ山

年始に再放送されたNHKの「プラタモリ」で、会津磐梯山周辺の特異な地形の一つとして、「流れ山」が紹介された。火山の噴火などに伴う山体崩壊によって生じた大量の土砂が山麓に崩れ落ちることによって、火山の麓にできた大小様々な起伏が「流れ山」だ。磐梯山周辺と同様に、道南の景勝地「大沼公園」では、流れ山と思しき地形が方角に見られる。これらは、活火山「駒ヶ岳」の過去の大噴火によっ

てつくられたものなのだろう。写真は「日暮山」の山頂から俯瞰した大沼公園だ。白煙を棚引かせて走る汽車のそれぞれ上側と下側にある大沼と小沼には多数の小島が点在している。これらも、駒ヶ岳の噴火活動によってできた流れ山である。

情報科学研究科 准教授 山本 学

北大時報 ① No.754 平成29年1月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html